Making Connections

Inward Mission for Japanese Universities

November 2016

ブリティッシュ･カウンシル主催

第 8 回英国大学視察訪問報告書

14 - 17 November 2016, UK

目次

1.	はじめに	Page 2
2.	University of Brighton	Page 4
3.	University of Sussex	Page 11
4.	Swansea University	Page 17
5.	University of Nottingham	Page 23
6.	University of Sheffield	Page 31
7.	巻末資料（第 8 回英国大学視察訪問参加者リスト）	Page 39

© British Council 2017

はじめに

英国の公的な国際文化交流機関であるブリティッシュ・カウンシルでは、日本の大学で国際企画、国際交流を始め様々な部署でご活躍の教職員の方々を対象に、英国の高等教育システムおよび大学の国際化に関する諸施策への理解を深めて頂くことを狙いとして、2016 年 11 月 14 日から 17 日までの日程で、「第 8 回英国大学視察訪問」を実施致しました。

プログラムには、9 大学（国公立大学 5、私立大学 4）から、10 名にご参加頂きました。訪問先は、イングランド南部のブライトンに位置し、職業を基盤にしたプログラムに定評があり、高い就職率を誇るブライトン大学、国際的な学術分野への貢献を目標に、2013 年から 2018 年までの新たな成長戦略に着手しているサセックス大学、南ウェールズに位置し、国際化に関する行動計画に基づき、国際的な知名度の向上を推進した結果、過去 5 年間で留学生の入学者数が約 40%伸びたスウォンジー大学、ラッセル・グループの構成校で日本の大学とのデュアルディグリーやダブルディグリーなどの教育連携にも積極的なノッティンガム大学、産業界とのパートナーシップに定評があり、英国を代表する日本研究センターを持つシェフィールド大学の 5 大学です。

ウェールズからイングランド南東部・中部まで、教育システム、歴史、規模などの点で特色が異なる 5 大学での視察を通して、各大学の国際戦略、研究連携、ブランディング戦略、学生の海外派遣支援・留学生支援の取り組みなどについて、比較対照をしながら理解を深めることができました。また、訪問先の国際部職員、日本と関わりのある教職員とのネットワーキングの機会や、参加者による大学紹介のプレゼンテーション発表の時間も設けられました。

以下、本視察訪問の参加者全員にご執筆のご協力を頂き、視察訪問報告書を作成しました。参加者の皆様が視察訪問をとおして得られた情報や知識、ご感想を広く共有させて頂き、日本の大学のあらゆる部署において日々、留学生や協定校関連の業務に取り組まれている方々のご参考となりましたら幸いです。

ブリティッシュ・カウンシル
教育推進・連携部

【第 8 回英国大学視察訪問開催概要】

実施日時： 2016 年 11 月 14 日（月）－11 月 17 日（木）

日本側参加機関：（アルファベット順）

関西大学、慶應義塾大学、熊本大学、京都大学、九州大学、名古屋大学、沖縄科学技術大学院大学、東海大学、東京工業大学 （計 9 大学）

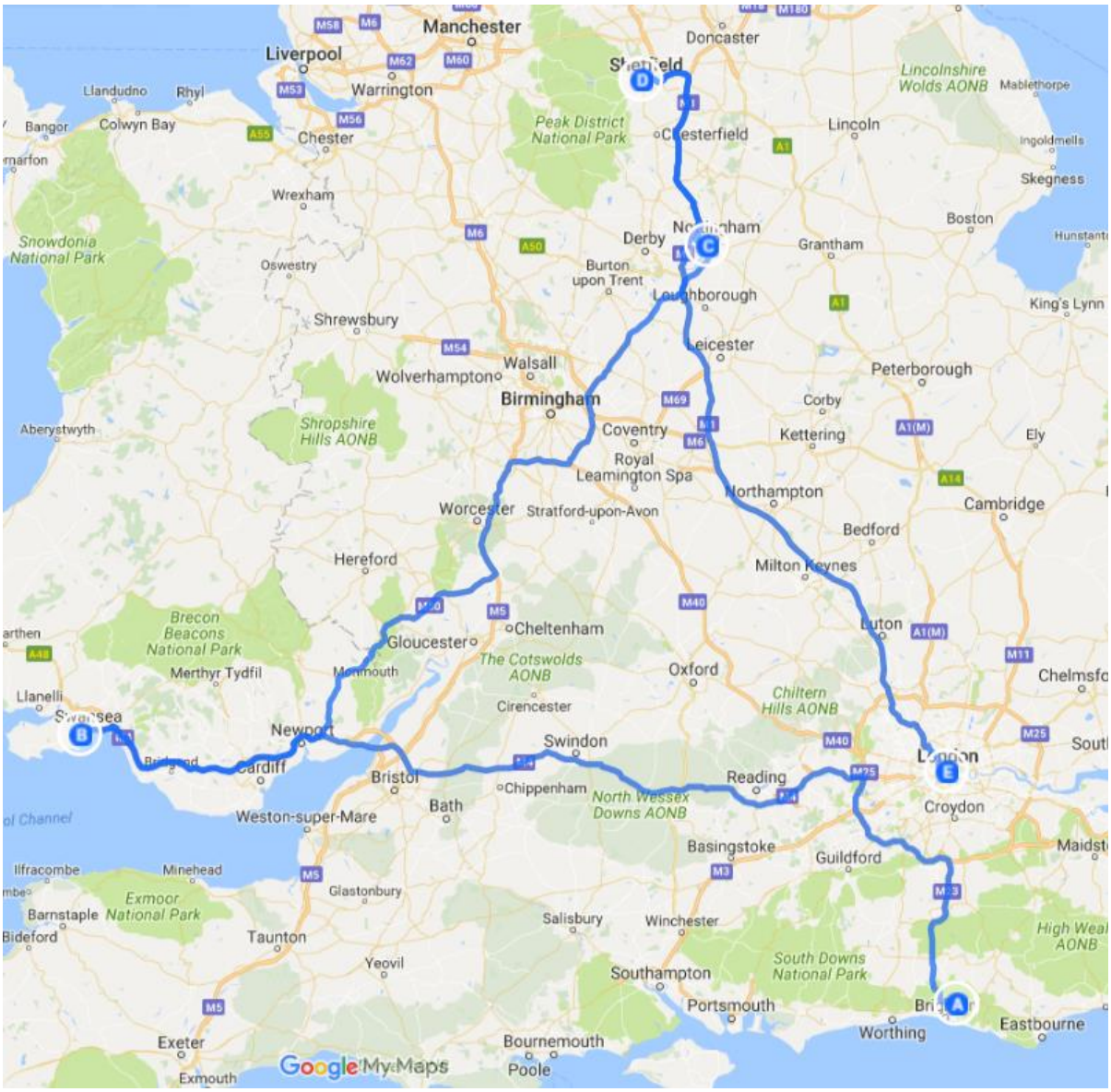
主催： ブリティッシュ・カウンシル

英国大学視察訪問　訪問大学一覧

訪問日		訪問先
11 月 14 日（月）	A	午前、University of Brighton 午後、University of Sussex
11 月 15 日（火）	B	Swansea University 訪問
11 月 16 日（水）	C	University of Nottingham 訪問
11 月 17 日（木）	D	University of Sheffield 訪問
11 月 18 日（金）	E	（オプショナル参加）夕刻、ブリティッシュ・カウンシル本部にて、"Experience Japan Exhibition" (慶應義塾大学主催、ブリティッシュ・カウンシル共催の日本留学フェア)参加校代表者、本視察訪問参加者、及び英国大学代表者を迎えてのネットワーキング・レセプション

© British Council 2017

第 8 回英国大学視察訪問　国内移動マップ



本報告書は、参加者の方々にご執筆頂き、ブリティッシュ･カウンシルが全体のとりまとめを行った上で作成したものです。参加者の皆様のご協力に、深く感謝申し上げます。報告書内、「所感」につきましては、執筆者である参加者の皆様のご意見であり、ブリティッシュ・カウンシルの公式見解ではありません。また 4 頁以降、参加者、報告担当者のご氏名は、所属機関名アルファベット順、敬称略で記載しております。どうぞご了承下さい。

本文中、2016 年 11 月時点において 1 英ポンドは 128 日本円となります。

© British Council 2017

1. 大学の概略

1859 年に Brighton School of Art として創立され、1992 年に総合大学となったブライトン大学は Brighton、Eastbourne および Hastings エリアに 5 つのキャンパスを有している。2014 年度の統計によると、全学生数は 20,683 人であり、うち国内学生 17,774 人（86%）、EU 学生 1,146 人（6%）、EU 域外からの留学生 1,763 人（8%）より構成されている。2016 年現在、日本人留学生数は 26 人であり、日本人同窓生は 160 人以上にのぼる。また、学生の在学課程別をみると、学士課程 16,861 人（82%）、大学院課程 3,395 人（16%）、およびその他（研究）427 人（2%）である。教職員数は 2,700 人である。

人文科学(Arts and Humanities)、生命、健康、物理科学(Life, Health and Physical Sciences)、社会科学(Social Sciences)で学部は構成されており、大学院課程(Brighton Doctoral College)も有している。特記すべき点はサセックス大学と共同運営の医学部を有していることである。

定評のある分野はアート・デザイン(Art ＆ Design)、 教育・教授(Education ＆ Teaching)、ホスピタリティ(Hospitality)、建築(Architecture)、ビジネスマネジメント(Business Management)である。

年間授業料に関しては、国内および EU 学生の場合、学士課程で 9,250 ポンド、大学院課程で 6,120 ポンドであり、留学生の場合、学士課程で 12,660 ポンド、大学院の博士課程で 14,400 ポンドである（2016 年 11 月時点の授業料、学部によって異なる）。

2014 年に発表された英国の大学の研究業績に関する公的な評価 Research Excellence Framework (REF)では、卓越した研究インパクトという評価項目において、英国のトップ 25%に入っている。また、2017 年の英国内大学ランキング(The Complete University Guide League Tables)では、90 位となっている。

ブライトン大学の教育プログラムは、職業へのフォーカスを基盤にしており(professionally and career focused)、卒業生は高い就職率を誇っている。とりわけ、アート＆デザイン、建築学、ビジネスの分野で定評がある。

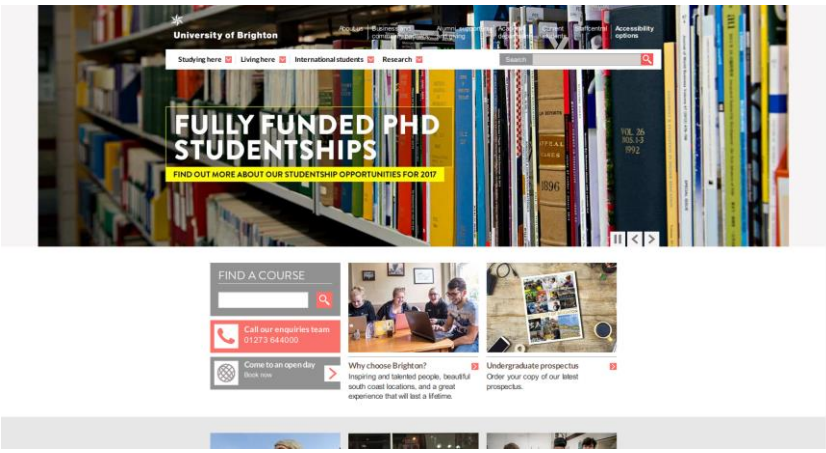
日本の高等教育機関との学術交流協定については、日本外国語専門学校、杏林大学、京都工芸繊維大学、明治大学、名古屋芸術大学、東京農工大学、東洋大学および早稲田大学と協定を結んでいる。

2. 訪問スケジュール

9:00 – 9:20	歓迎の挨拶 Welcome to the University of Brighton Richard Spoor, International Development Manager
9:20 – 10:00	大学としての国際戦略の展開と推進 Development and Implementation of corporate international strategy Professor Andrew Lloyd, Dean of the College of Life, Health and Physical Sciences and Dean with International portfolio
10:00 – 10:30	国際研究戦略の現況 International research strategy issues; Doctoral College (Research & Enterprise) Professor Neil Ravenscroft, Director of the Brighton Doctoral College
10:30 – 10:45	休憩
10:45 – 11:45	留学経験者ネットワーク、ブライトン英語センター、短期留学について Alumni, Brighton Language Institute, Study Abroad profiles; Japan Patrick Brook, Director Brighton Language Institute Mary Jones, Study Abroad Office Manager Faye Brown, Head of Alumni Engagement

11:45 – 12:30	日本との学術的な繋がり：アート、デザイン、メディア Academic links with Japan; Art, Design & Media Duncan Bullen, Principal Lecturer, Academic Programme Leader Fine Art, School of Art, Design and Media Helen Kennedy, Head of School of Media
12:30 – 13:30	質疑応答、ネットワーキングランチ Q&A and networking lunch

留学生のためのブライトン大学ガイドブック



ブライトン大学のホームページ(www.brighton.ac.uk)

3. 発表要旨

歓迎の挨拶

Welcome to the University of Brighton
Andrew Lloyd, Dean of the College of Life, Health and physical Sciences and Dean with International Portfolio

日本人学生に人気のあるコースは以下のものである。観光(Tourism)、経営管理(Business Management)、国際開発学(International Development)、社会科学(Social Sciences)、アート・デザイン(Art & Design)、英語教授(TESOL)、大学付属語学学校(Brighton Language Institute)。

主な奨学金制度として、①学部生向け 3,000 ポンド授業料減免 10 人、②大学院生向け 5,000 ポンド授業料減免 30 人、③大学院生向け授業料全額免除 1 人、④研究フェロー向け授業料全額免除（最大 3 年間）2 人がある（2016 年 11 月時点）。

教育プログラムは、職業を基盤にしたプログラムを提供している。ブライトン大学の卒業生に代表的な職業は、建築家、医者、会計士、コンピュータエンジニア、メカニカルエンジニア、薬剤師など。先駆的な職業教育を提供しており、研究は常に応用の可能性を視野に入れ、産業界との繋がりを重視している。また、研究の基本方針は「実用的知恵」(Practical Wisdom)に基づいている。143 カ国から留学生が学んでおり、国籍が多様で、特定の国に偏っていない点が特徴的である。サセックス大学と共同で実施している医学部は、年間 150 人の学生を受け入れており、学生の満足度の面で英国 1 位を誇っている。

新たに来英した留学生には、空港出迎えサービスや無料のオリエンテーションセッションが提供される。学部 1 年生には、無料英語サポートがあり、入学当初からチューター（学生の個人指導にあたる教師）がつけられる。学内に宿舎が提供され、家賃は年間 4,095 ポンド～7,176 ポンド。授業料等の納入は 6 ヶ月毎の支払が可能で、早期納入の場合、5%の割引が適用される。年間の授業料は、学部（講義中心コース）11,780 ポンド、学部（スタジオ・実験室コース）13,500 ポンド。大学院（講義中心コース）12,330 ポンド、大学院（スタジオ・実験室コース）14,130 ポンド。年間の生活費は、約 7,200 ポンド～9,600 ポンド。週間宿舎料は、約 105 ポンド～184 ポンド。また、ブライトンは観光産業が盛んなため、アルバイトの機会が多くある。（学費および生活費等は 2016 年 11 月時点。）

大学としての国際戦略の展開と推進

Development and implementation of corporate international strategy

Andrew Lloyd, Dean of the College of Life, Health and physical Sciences and Dean with International Portfolio

ブライトン大学の国際戦略は、「実用的知恵」（Practical Wisdom）を基本概念としており、国際戦略は、次の 4 つの側面をもっている。①教育の国際化（カリキュラムの国際化、教職員と学生が双方に学び合える環境の充実化）、②国際的パートナーシップ（研究の質向上のため、優秀な研究の戦略的パートナーの発掘）、③国際的コミュニティ（多様な文化的背景を持つ教職員の充実）、④国際的位置づけ（地域レベル、国家レベル、国際的なレベルでの存在感の可視化）

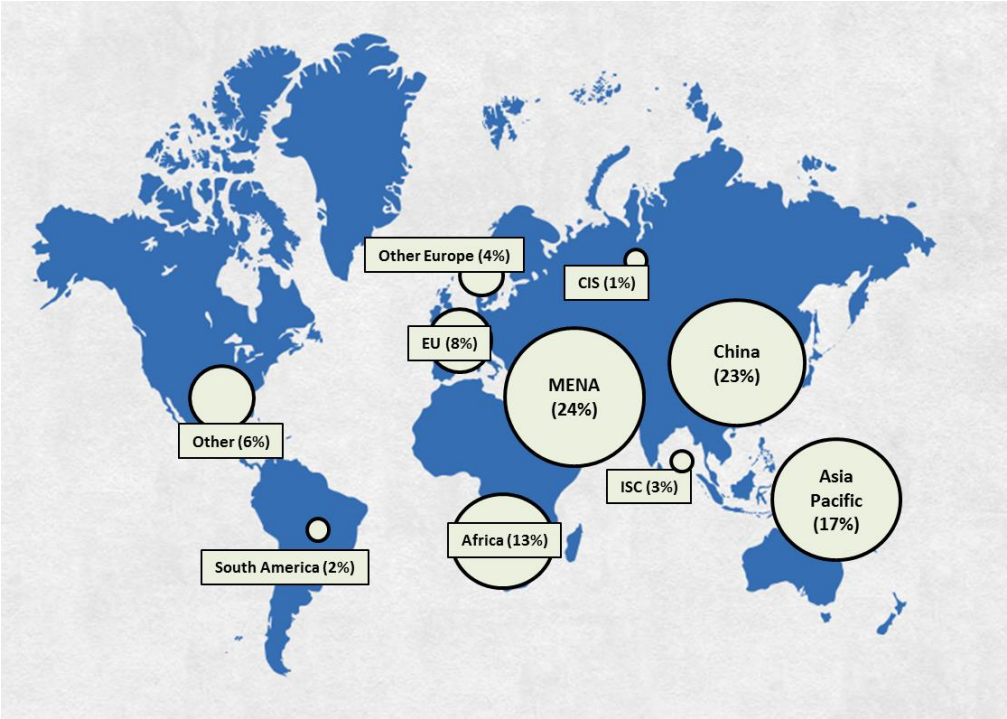
国際的パートナーシップの側面では、教職員および学生の交流、国際共同研究や産学連携、プログレッション・プログラム（一定の教育プログラムを経てブライトン大学の学士課程に編入する）が実施されている。

日本とのパートナーシップでは、日本外国語専門学校（ブライトン大学の言語センターと学生のプログレッション・プログラム）、京都工芸繊維大学（芸術・デザイン分野で学生および教職員の交流）、明治大学（スポーツ科学分野で学生および教職員の交流）、名古屋芸術大学（学生および教職員の交流）、東京農工大学（共同研究、学生および教職員の交流、技術移転の協定）、東洋大学（学生および教職員の交流、共同知的財産の協定）および早稲田大学（スポーツ・サービスマネージメントや人文学の分野で 1 年の交換留学）と連携している。

学生リクルート戦略として、2014 年に優先国(Priority Countries)を分析・選定する作業を行った（2016 年に更新）。優先国は、次の 3 つに分類されている。①コア(Core)：最大のターゲットでリクルート活動に力を入れる、②新興(Emerging)：コアよりやや小さいマーケットではあるが、拡大の可能性があり、リクルート活動に力を入れる、③維持(Maintenance)：様々な規模のマーケットだが、成長は横ばいか減少のため、留学フェアなどの参加のみで追加広告を行わない。

コアの国々は、中国、香港、マレーシア。新興の国々は、湾岸諸国（サウジアラビア、バーレーン、ヨルダン、クウェート）、カナダ、トルコ、ベトナム、米国、ブラジル、タイ、台湾、韓国、日本。維持の国々は、インド、ナイジェリア、チャンネル諸島、モーリシャス。

【留学生の出身別（2015 年）】



国際マーケティング戦略は、学部および大学院を対象にしている。基本的に担当のスタッフが担当の国々を訪問し、リクルート活動を行う。4 月-5 月頃に、マレーシア、ベトナムおよびタイにおいて募集および面接を実施している。学部長による海外リクルート活動も実施している。これらの国において、新聞広告、SNS などによる広告を行う。

海外でブライトン大学独自の英語検定試験(Brighton English Language Test)を無料で実施している。IELTS などの結果は不要で、この試験結果により入学可否を判定する。

大学が位置しているブライトンという街を広く知ってもらうことが重要である。

Hotcourses Abroad という留学検索専門サイトと、同サイトが運営する香港、中東、タイおよびベトナムのサイトと契約している。

その他、EasyUni、Masterstudies、およびブリティッシュ・カウンシルが運営する Education UK などのウェブサイトにも登録している。これらのサイトを経由してブライトン大学の閲覧頻度が高くなった。しかし、閲覧はあくまでもきっかけにすぎず、入学意欲を高めることができるよう、努力が必要である。

問い合わせに対応する受動的コミュニケーションではなく、全応募者に複数の電子メール(Conversion Activity)を送付し、それぞれの応募者に応じた内容を送付する。これは、応募者がブライトン大学を留学先として決定するよう奨励するものである。

留学生のリクルート活動の障壁・課題・挑戦は、大学ランキング、英国政府のビザ政策、生活費、出願に関する事前と事後の情報取得難易度、ブライトン大学の知名度（留学先として選んでもらうよう広く知ってもらう努力、例えば、ブライトンのサッカーチームが活躍したら、全世界にブライトンの名が広く知られ、ブライトン大学の知名度も向上するなど。）

国際研究戦略の現況

International research strategy issues; Doctoral College (Research & Enterprise)
Neil Ravenscroft, Director of the Brighton Doctoral College

研究・産学連携の組織は、研究・産学連携担当副学長の下、研究・エンタープライズマネージメント部があり、人文分野、生命・健康・物理科学分野、社会科学分野の 3 人のカレッジ・ディレクター、博士課程カレッジ長および文化連携・イノベーション担当係長によって構成されている。

研究・エンタープライズマネージメント部は、研究オフィス、エンタープライズ部、博士課程カレッジから成っている。研究資金は、年間 1 千万ポンドで、その 30%は EU から得ている。

また、英国の公的な研究助成機関であるリサーチカウンシルから助成を受けた博士トレーニングパートナーシップを実施している。このパートナーシッププログラムによって年間 50 人が進学してくる。

研究・エンタープライズ戦略(Research & Enterprise Strategy)は、5 つの理念、すなわち①創造性(Creative)、②革新性(Radical)、③責任(Responsible)、④健全性(Healthy)、および⑤連携(Connected)に基づいて実施されている。

研究オフィスは、資金獲得前のチーム(Pre-award Team)と資金獲得後のチーム(Post-award Team)に分かれる。資金獲得前のチームは、資金公募情報の収集、応募支援などを担当する。資金獲得後のチームは、資金の執行などをサポートする。

エンタープライズ部は、コミュニティと大学との連携支援も行う。

博士課程カレッジは、3 年間の博士後期課程のプログラムを運用しており、計 550 人～600 人の学生が在籍している。博士後期課程の学生に対しては、修了後、大学で研究職に就かない場合でもビジネス界で活躍できるよう訓練を提供している。

現在の研究を取り巻く環境について、意識しておく必要があるのは以下の点である。

①Research Excellence Framework (REF)[1]： REF の結果は、大学の長所を判別することに役立つ。

②大学のランキング： 重要視する国があるが、研究の世界では口コミが最も機能している。

③EU からの離脱： EU から得られる研究資金への依存度が高いことから、EU 離脱によって研究環境が大きく変わる可能性がある。

④研究資金の減少： 少ない資金を有効に活用する必要がある。従って、パートナーシップの活用を通して効率化を図ろうとしている。

⑤Teaching Excellence Framework (TEF)[2]： 今後新たに導入される。学部教育から始まり、大学院教育に広げられる予定。

留学経験者ネットワーク、ブライトン英語センター、短期留学について

Alumni, Brighton Language Institute, Study Abroad profiles; Japan
Faye Brown, Head of Alumni Engagement

付属語学学校

ブライトン大学付属語学学校 UBLI(University of Brighton Language Institute) は、留学生のための予備教育を行うなど、留学生の募集に重要な役割を果たしている。例えば、大学院に入学したい留学生が IELTS6.5 以下の場合、UBLI が提供するプリセッショナルコースに入学する。プリセッショナルコースは、3 種類あり、まずは大学進学準備英語プログラムの English for Academic Purposes (EAP)。人気を集めている EMA プログラム(Extended Master's Program)では、IELTS5.5 を取得した学生が、まず英語の予備教育コース（期間は 8 週間、12 週間）で学び、修士課程に入学し、最短で 14 ヶ月で修士号を取得できるという内容のプログラムである。また、Summer Pre-sessional English for Academic Purposes Course（期間は 4 週間、8 週間、12 週間）も人気がある。

UBLI は、個々のリクエストに合わせたコース(Tailor-made Course)も提供している。中国の現職教員向け英語研修や、日本の大学生向けに英語コースと見学旅行を組み合わせるなど、多様な内容を提供可能である。

i-ASK Program は、最初の学年で全学生に無料でレポート作成方法を指導するなどの英語サービスを提供している。

---

[1] Research Excellence Framework (REF)；英国高等教育機関の研究の質評価を行うシステムで、2014 年 12 月に結果が発表された。http://www.ref.ac.uk/

[2] Teaching Excellence Framework (TEF);教育の質に対する公的評価として Teaching Excellence Framework(TEF)の発案が英国政府からなされた。

8 年前に開発したブライトン大学独自の英語能力検定試験(International Student Testing)は、海外において無料で実施し、学生の英語能力を判定し、UBLI のどのコースに入るべきかの判断に使用する。試験は 2.5 時間かかり、翌日に結果が判明する。台湾、日本、中国、韓国、トルコなどで実施する。

スタディアブロード（短期留学）オフィス

スタディアブロードオフィスは、English Plus Junior Semester Abroad (EPJSA) Program を担当している。このプログラムは期間が 8～10 ヶ月で、費用は、8 ヶ月コース（IELTS6.0）の場合、7,200 ポンド、10 ヶ月コース（IELTS5.5）の場合、9,800 ポンドである。言語教育のほか、12 単位の専門教育を登録・取得できる。しかし、英語能力の条件を満たさない場合、事前に渡航し、英語のプリセッショナルコースに参加して予備教育を受けてから EPJSA に入る。

卒業生ネットワーク

卒業生ネットワークについては、約 15 万人分の同窓生のデータベースを保有している。データベースのうち、8,000 人が留学生であり、内 2,600 人はアジア出身、内 154 人は日本に居住している。また、海外に 4,000 人の同窓生ボランティアがいる。これらのボランティアは、例えば、母校に戻り、講義を行うほか、大学が海外で学生リクルートを行う際にサポートを提供する。0.1%の同窓生（約 150 人）が経済的にも大学に対して貢献している。

同窓生との連絡手段は電子メールで、年間 4 回メールマガジンを配信している。また、年に 1 回出版物を発送。さらに、例えば大学のスポーツについてなど、特定の内容を希望している場合は、その分野の情報も配信する。また、リクルートチームと協力して、どの国での活動に力を入れるべきか見極め、その際には、同窓生数が多い国も考慮する。

年に 1 回発行される同窓生向けのマガジン

日本との学術的な繋がり：アート、デザイン、メディア

Academic links with Japan; Art, Design & Media
Helen Kennedy, Head of School of Media
Duncan Bullen, Principal Lecturer, School of Art, Design and Media
Angela Bright, Head of the School of Art

Art & Design の分野で、名古屋芸術大学との交流を 20 年間行っている。両大学で優秀な作品を表彰している。それぞれ 6 人枠の学生交流協定を使って学生を派遣している。

京都工芸繊維大学との交流は、Design Lab Workshop を通して、ブライトン大学の学生および教員が京都に出向き、現地の学生とグループワークにより作品を作る。外部資金を獲得して、実施している。

4. 日本の大学が「国際化」を図る上で、特に役立つと思われた取組み、日本の他大学にもぜひ知ってもらいたいと思えた新規かつユニークな取り組み・方針等について

教育プログラムが職業を基盤にしており (Professionally and Career Focused)、ブライトン大学が 2016 年から打ち出している 5 年間の大学戦略は「実用的知恵」(Practical Wisdom)を基本概念にしている点が非常に特徴的である。卒業後、職に就くことができるよう導く考え方は実践的で、参考となった。

留学生受け入れやリクルート活動を行う際、限られた財源・人材を有効に使うため優先国(Priority Countries)を選定する作業が日本の大学に参考となる取り組みだと考える。このような優先順位を設定し、戦略的に留学生誘致活動を行っている日本の大学はまだ少数だと思われる。

留学生誘致活動のなか、担当のインターナショナル・オフィサーのみならず、学部長を海外リクルート活動に同行させる点(Deans'Trip)が興味深い。特に関心が集まっている分野の学部長が同行し、現地の学生が直接学部長の講話を聞くことにより、留学を決定する契機になりうる。

独自の英語能力試験を含めて、留学生受け入れ選考を現地で実施し、高額の英語能力試験を課さない点も留学生獲得が厳しいこの時期に合致している。

入学希望者に対し、応募時点で複数の電子メール(Conversion Activity)を送付して密接な信頼関係を構築しようとしている点が参考となる。

視察訪問の様子

視察参加者の記念撮影

5. 報告者所感

ブライトン大学に隣接しているファルマー・スタジアム

ブライトン大学に到着したやいなや、ブライトン大学に隣接している完成したばかりのファルマー・スタジアム（Falmer Stadium）が目に入った。球技専用の競技場であり、ラグビーワールドカップ 2015 の会場の一つとして使用された。2015 年 9 月 19 日にここファルマー・スタジアムでラグビーワールドカップのグループ B 開幕戦が開催され、2 度の W 杯優勝経験がある南アフリカ代表に対し、1991 年大会以来 W 杯での勝利が無い日本代表が 34-32 で勝利した。「ブライトンの奇跡」、」ラグビーワールドカップ史上最大の番狂わせ」と称された試合の舞台となった、と大学の関係者が興奮気味に語ってくれた点が印象に残った。また、いかに大学の知名度を上げるかは中小規模大学の使命だと実感した。学問のみならず、スポーツの成功話でもよいので、結果として知名度アップにつながればよしという前向きな姿勢が見習うところだと実感した。

（報告担当：スネート、岸）

1. 大学の概略

1961 年に創立されたサセックス大学は、英国南部にある海岸沿いブライトンの街にキャンパスを構えている。Falmer 駅に隣接しており、ブライトン大学とは隣同士に位置している。世界をリードする研究大学の一つであり、3 名のノーベル賞受賞者、14 名の英国王立協会特別研究員、および 12 名の英国学士院特別会員を輩出している。

2015 年度の統計によると、総学生数は 15,688 人であり、うち国内学生 9,976 人（64%）、EU 出身学生 1,772 人（11%）、140 カ国からなる留学生 3,940 人（25%）により構成されている。学生の在学課程別をみると、学士課程 10,684 人（69%）、大学院課程 4,883 人（31%）である。教職員数は 2,160 人。

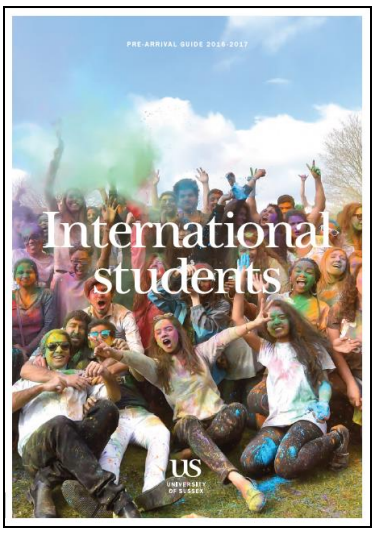
学部構成は 12 であり、ビジネス、マネジメントと経済学（Business, Management and Economics）、教育学と社会福祉学（Education and Social Work）、英語学（English）、グローバル研究（Global Studies）、工学と情報科学（Engineering and Informatics）、歴史学、美術史学と哲学（History, Art History and Philosophy）、法学、政治学と社会学（Law, Politics and Sociology）、生命科学、数学と物理科学（Life Sciences、Mathematics and Physical Sciences）、メディア、フィルムと音楽（Media, Film and Music）、心理学（Psychology）。特記すべき点は、ブライトン大学と共同運営の医学部を有することである。

定評のある分野は、歴史学（History）、英語学（English）、心理学（Psychology）、地理学（Geography）、開発学（Development Studies）である。特に開発学の分野では、QS World University Rankings by Subject 2016 において、世界第2位であり、ハーバード大学の次にランクインしている。

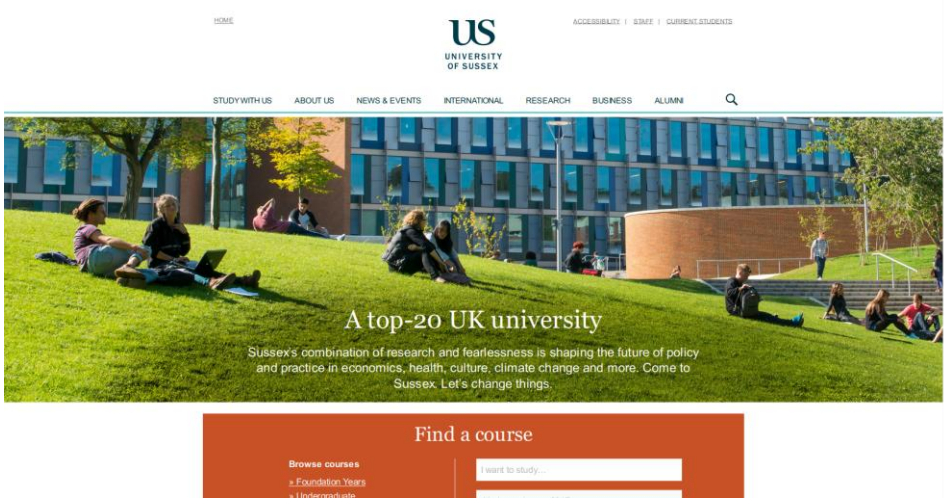
年間授業料に関して、国内および EU 学生の場合、学士課程は 9,250 ポンド、大学院課程は 7,700 ポンドとなっており、留学生の場合、学士課程および大学院課程は 15,100 ポンドである。

英国研究評価システムである Research Excellence Framework (REF) 2014 では、75%以上の研究活動が独創性、重要性、厳密性の面で世界トップクラスの最高評価もしくは、優秀レベルの評価を獲得した。QS World University Rankings 2016 では総合で 187 位であった。また、2017 年英国大学ランキング(League Table Ranking)では、18 位となり、2016 年の 21 位からランクアップした。そして、Times Higher Education World University Rankings 2016-2017 では、149 位にランクインした。

120 以上の国際パートナーと交流をしており、その中に、香港中文大学、香港科技大学、香港中文大学（深圳）、中国人民大学、ジョージタウン大学、カリフォルニア大学サンタクルーズ校、ガーナ大学およびマヒドン大学（タイ）が海外の戦略的なパートナーとして位置づけられている。



留学生のためのサセックス大学ガイドブック



サセックス大学のホームページ(www.sussex.ac.uk)

2. 訪問スケジュール

14:30 – 14:45	歓迎の挨拶 Welcome to the University of Sussex Cathy Drew, International Officer
14:45 – 15:30	留学生サポート International Student Support at Sussex Sara Dyer, Head of International Student Support Joanne Chee, International Student Adviser
15:45 – 16:30	大学のブランティング、レピュテーションマネジメント及び PR University branding, Reputation Management and PR Mark Tobin, Head of Digital and Creative Media James Hakner, Media Relations Manager
16:45 – 17:15	国際研究パートナーシップ International Research Partnerships Peter Boddy, International Partnerships Officer Dr. Simon James Thompson, Head of Education
17:15	閉会の挨拶、質疑応答 Closing remarks and questions

3. 発表要旨

歓迎の挨拶

Welcome to the University of Sussex
Cathy Drew, International Office

様々な教育プログラムを提供しており、学生には主専攻の専門分野以外に、ほかの分野も学習するよう奨励している。定評のある分野は、国際学(Global Studies)、地理学(Geography)、ビジネス(Business)、マネジメントと経済(Management and Economics)、アーツと人文学(Arts and Humanities)、工学(Engineering)、生命科学(Life Sciences)、心理学(Psychology)、サセックス大学と共同運営の医学部(Brighton and Sussex Medical School)などである。

研究によるインパクトは、英国のトップ 15 を誇っている。図書館は、24 時間オープンしている。様々な奨学金制度を有しており、特に学長国際奨学金(Chancellor's International Scholarship)が推奨されている。

キャンパス内に 9 つの学生宿舎がある。宿舎料は、1 週間に 86.82 ポンドから 150.01 ポンドである。留学生の出身国は、中国、EU、米国、約 100 人の日本人学生、ナイジェリア、中東などである。

留学生サポート

International Student Support at Sussex
Sara Dyer, Head of International Student Support
Joanne Chee, International Student Adviser

留学生がサセックス大学に在籍している間、留学生支援課(International Student Support Team) が世話をする。

留学生が直面する課題は、①英語、②学問的な問題、③経済的な問題（出身国の情勢により国外送金が難しい場合など）、④英国の学生との交流、⑤ビザ、⑥気候、⑦適切な宿舎、⑧英国の文化への適用、⑨ホームシックなどが上げられる。留学生支援課がこれらの課題を克服できるよう、留学生の補助を行う。

入学が決定し、渡航する前から世話が始まる。渡航前のガイドブックの PDF 版を送る。

Facebook などの SNS を通して、入学予定者とコミュニケーションをとっている。入学する時期に新入生グループを作り、相互コミュニケーションを促進する。

渡航後のオリエンテーションで得られる情報量に圧倒される留学生が多いため、オンラインでオリエンテーション・モジュール(Online Induction Module)を提供し、出発前にチェックできるようにしている。

渡航者が集中する週には、無料の空港出迎え、ヒースロー空港から1日 3 便の無料バスを提供する。先輩学生があたたかく空港出迎えをする、新入生歓迎会などのイベントを展開する。2015 年秋に実施した調査では、サセックス大学による到着時の歓迎ぶりが 159 機関中、第 1 位のよい経験として評価された。

日常的な相談業務、見学旅行、クリスマス休日期間中の宿舎に残った留学生のためのクリスマスパーティ、HOST UK プログラムを通して、留学生のホームステイを実施するほか、日本人スタッフによる日本人留学生の支援が提供されている。危機的な時期に手厚い支援を提供しており、例えば、日本の大震災時に日本人留学生のための集まりを開催した。

留学生支援サービスの質向上のために、調査や小人数グループディスカッションを行い、問題点や留学生の要望を把握している。また、学生組合(Students' Union)と密接に連携を行っている。学生組合の中に留学生担当係がおり、留学生のみ成らず、新入生全員対象に、先輩が新入生を手助けするスキームの Students' Union Buddy Scheme を実施している。このスキームを遂行するため、常勤のスタッフが配置されている。

Sussex Language Café は毎週行い、様々な言語を話す留学生がそれぞれのテーブルに集い、その言語を使ったり、その国の留学生と交流したい学生が立ち寄る。大きなイベントとして、One World Week を開催し、留学生が様々な企画を実施する。英国の学生にとって非常に有意義なものとなっている。

留学支援課以外にも、次のサポートセンターがある。学生生活センター(Student Life Centre)、カウンセリングサービス(Counselling Service)、学生・障害支援課(Student Support Unit including disability support)、礼拝部(Chaplaincy)、就職課(Careers & Employability)、宿舎支援課(Campus & Residential Support)など。

留学生アドバイザー (International Student Adviser) は、ビザについて、渡航前から卒業後、英国に滞在継続できるまでビザのアドバイスをする。Tier 4 status の留学生が休学する前に必ず留学生アドバイザーと面談を行う必要がある。

短期留学 (JYA: Junior Year Abroad) は、日本人留学生に人気がある。集中英語プログラムと予備的な専門教育が提供されている。

2015 年 4 月より、日本の在留カードのような生体認証情報を含む滞在許可証 Biometric Residence Permit (BRP) が義務づけられた。多くの学生が BRP を紛失しているので、注意を要している。

大学のブランティング、レピュテーションマネジメント及び PR

University branding, Reputation Management and PR
Mark Tobin, Head of Digital and Creative Media
James Hakner, Media Relations Manager

サセックス大学のブランドを全体的に見直し、再構築する動きは、2014 に大学のランキングが下がって以降に始まった。その要因について様々な調査、研究を行った結果として、例えば、ロゴの使用方法が統一されていないことが指摘された。これらのフィードバックを鑑みて、Pentagram という大手デザイン会社と契約し、The Sussex Brand の再構築に 3 年という年月を費やし取り組んだ。ロゴは原点に戻り、シンプルに設定した。ロゴ、パワーポイントテンプレート、写真などをいつでもダウンロード可にして、使いやすい環境を提供している。また、大学のホームページを全面的に作り直し、大学のパンフレットも新しいデザインに変更した。

サセックス大学ロゴ

サセックス大学ロゴのカラー使用ガイドライン

従来の写真の使い方

現在の写真の使い方

ブランドの再構築の結果、オープンデイにおける見学希望者が、6 月期に 20%、9 月期に 59%、10 月期に 19%増加した。新パンフレットも高評価を受けており、75%はこのパンフレットを見た後、出願したいと思うようになったそうである。全体として、学部の出願者が 33%増、大学院は 73%増を誇っている。

広報室は、5 人のメンバーから 15 人に増員された。メディアとの密接な連携を心がけている。サセックス大学は年間 7,000 回メディアに取り上げられた。また、話題となっているトピックに専門家としてコメントできる教員をメディアに紹介している。さらに、関心を集められそうなテーマを探し、記事をメディアに提供する。内容をまとめる際、きれいに見えるようグラフィックデザインナーに依頼し、図表を作成し、メディアに提供する。英国の EU からの離脱に関する国民投票が注目されていた時期にコメントをできる教員の情報を流し、取材受け入れを奨励した。あるいは関連の記事を書いてもらい、メディアに投稿した。様々な SNS を活用している。

国際研究パートナーシップ

International Research Partnerships
Peter Boddy, International Partnerships Officer
Dr. Simon James Thompson, Head of Education

International Office は、リクルートのほかに、120 機関以上との交流協定を担当しているが、その半分ほどしか機能していない。そのため、戦略的パートナーシップのみに絞って力を入れており、サポートする資金(International Research Partnerships & Networks Fund)も潤沢に用意される。このパートナーシップは、研究、教育、学生交流に

おいて展開する。例えば、ガーナ大学とのプログラムは非常に成功し、ガーナにおけるサセックス大学の知名度が高くなった。

教育学と社会福祉学部（School of Education and Social Work）には、中国と日本からの留学生が多く在籍している。研究と教員養成プログラムに定評がある。4 つの研究センターがあり、①幼児期と青年期における革新と研究（Innovation and Research in Childhood and Youth）②国際教育（International Education）③教授と学習研究（Teaching and Learning Research）④高等教育と公平性の研究（Higher Education and Equity Studies）である。高等教育の分野で広島大学と共同研究を行っている。

日本の大学が「国際化」を図る上で、特に役立つと思われた取組み、日本の他大学にもぜひ知ってもらいたいと思えた新規かつユニークな取り組み・方針等について

大学の執行部がブランドやその再構築の重要性を認識し、巨額予算を投資して、大学のイメージ統一化に成功した。日本の大学ではこの点についてまだ認識が低い。サセックス大学の成功例が大いに参考となった。ブランディング作業が終わった後、大学の教職員に説明会を開催し、共通認識を持たせるなど徹底している。

留学生サポートチーム（International Student Support Team）が留学生のために提供しているサポートは多様で、留学生を対象とした調査やフィードバックに基づいているため、留学生の実際のニーズに合致している。学生組合と連携して様々なサポートをしている点も、日本では未実施なので、大変参考となった。

視察訪問の様子

視察参加者の記念撮影

4. 報告者所感

ブライトン大学とサセックス大学は、半日ずつの日程で訪問したためキャンパスツアーの時間がなく、大学の雰囲気があまりつかめなかったのが残念ではあったが、どちらの大学のキャンパスもきれいに整備されており、学生たちがいきいきとしていたのが印象的であった。

駅を挟んですぐ隣りにある大学ではあるが、建物はブライトン大学が近代的で明るい感じ、サセックス大学は重厚な建物で統一されており、印象がまったく異なるのは驚きであった。

ブライトン大学は前身となるカレッジがあるとはいえ 1992 年に創設、サセックス大学は 1961 年に開学と歴史的には比較的新しい大学ではあるが、どちらの大学も世界中から留学生が集い、ノーベル賞受賞者を含め優秀な卒業生を輩出していることに日本との違いを感じた。

この 2 校にかかわらず、今回訪問したすべての大学にいえることではあるが、ランキングなどの外部指標を非常に重視している印象を受けた。ランキングの順位などをのぼりにしてアピールするなど、学生が大学を選択する際に、重要な指針となっていることがうかがえる。

同時に、どの大学もブランディング戦略に力をいれており、特にサセックス大学のロゴから印刷物、パワーポイント、ホームページにいたるまで統一的なイメージを作成し、それを全学的に運営している方針には感銘を受けた。日本の大学でここまでブランディングに力を入れている大学はないのではないかと考える。

大学の職員の方が、自分の大学や自分の職務に非常に自負心をもち、大学に貢献できることを生きがいに感じて仕事をしている様子がプレゼンテーションやネットワーキング時の会話から感じ取ることができた。

また、地域についても愛着をもっており、ブライトンは観光の街とのことで、観光をしたかということを多くの方から聞かれたが、今回の訪問では時間の制約により観光していないことを伝えると、非常に残念がって次の機会にはぜひといわれたことが印象に残った。

この訪問を通じて、改めて自分の業務に取り組む姿勢を見直し、再考させられるよい機会となった。

（報告担当：スネート、岸）

1. 大学の概略

スウォンジー大学は、1920 年に設立された研究重点大学であり、設立以来、探求と発見を重ね、適切なバランスの下に卓越した教育と研究を提供している。

大学は、南ウェールズのガワー半島(Gower Peninsula)の末端、スウォンジー湾(Swansea Bay)を望む緑豊かな場所にあり、2016 年 11 月時点での学生数は 15,921 名、教職員数は 2,510 名である。多様な文化が入り混じったキャンパスでは、将来必要とされるグローバルなスキルを得るための機会が提供されている。また、スウォンジー大学では、主流となる幅広い学科構成を持つとともに、特徴のあるニッチな学科も兼ね備えており、教養レベル、学士、修士、博士のコースがある。さらに、毎年、6,000 ポンドの留学生向け奨学金(International Excellence Scholarships)が用意されている。

2015 年 9 月には、学生環境の更なる充実のために、4 億 5 千ポンド（約 580 億円）をかけ、65 エーカー（約 0.25 平方キロメートル）のベイキャンパスを開設した。ベイキャンパスには、工学部(College of Engineering)と経営学部(School of Management)が設置され、素晴らしい施設と実験室を備えている。

また、理学、科学技術、工学と数学、医学と生命科学、社会科学、芸術と人文科学と、様々な分野にわたって、世界トップレベルの研究が行われてい。2014 年に発表された研究の質に関する全国調査(Research Excellence Framework: REF)によると、26 位にランクインしている。また教授の質(Teaching Excellence)において、QS 社の評価では最高評価の 5 Star を獲得している。2014 年には、Whatuni Student Choice Awards の University of the Year に選出されている。更に Times & Sunday Times 紙による英国国内大学ランキング(Good University Guide 2017)においてウェールズ地方約 30 大学の年間最優秀大学(Welsh University of the year）に輝いている。

2. 訪問スケジュール

11:00 – 11:15	ネットワーキング Tea and Coffee/Networking
11:15 – 11:30	歓迎の挨拶と大学紹介 Welcome and Introduction
11:30 – 12:15	国際戦略の企画と実践 Development and Implementation of International Strategy
12:15 – 12:45	大学のブランド戦略と広報活動 University Brand Management and PR
12:45 – 13:30	スウォンジー大学スタッフとのランチ・ネットワーキング Lunch and networking with Swansea University Staff

13:30 – 14:00	日本からの訪問大学の紹介 2 minute introduction by each universities / Q&A
14:00 – 14:45	シングルトンキャンパスの視察　Tour of Singleton Campus
14:45 – 15:00	ベイキャンパスへ移動　Travel to Bay Campus
15:00 – 15:15	研究のマーケティング活動　Marketing our Research
15:15 – 15:30	休憩　Coffee break
15:30 – 16:15	ベイキャンパスの視察　Bay Campus Tour
16:15 – 17:00	工学カレッジにおける国際連携の企画とマネージメント College of Engineering Case Study: Development and Management of International Partnerships

3. 発表要旨

国際戦略の企画と実践

Development and Implementation of International Strategy
Sian Impey, Head, International Development Office

スウォンジー大学の国際業務を担当するオフィスには、中国、インド、ナイジェリアのサテライトオフィス勤務の 5 名を含め、約 30 名のスタッフがいる。また、役割別に学生募集(Student Recruitment)、海外留学派遣(Go Global (student mobility))、管理とコンプライアンス(Administration and Compliance)、パートナーシップ(Partnerships)と 4 つのチームがあり、より総合的な国際業務を心がけた編成が行われている。

国際化の定義については、個人や組織によってバリエーションがあると思われるが、スウォンジーでは、
“Comprehensive internationalization is a commitment, confirmed through action, to infuse international and comparative perspectives throughout the teaching, research, and service missions of higher education.”

「包括的な国際化とは、教育・研究・その他高等教育が持つミッションの全てにおいて、国際的・相対的な視野を育むための、行動に裏打ちされた確たる姿勢である。」
（Professor John K. Hudzik, Professor and Former Vice-President of Global Engagement, Michigan State University）
と考えている。

大学の要となる使命の一つが「国際化」であるとし、学生にはグローバルな市民として考え、行動できるようになることを求めている。多くの学生は留学を通して人生を変えるような経験を経て成長し、自信を着けて帰国している。そういった経験を企業は高く評価するため、就職率の向上にもつながっている。このような留学の機会を全ての学生に与える為に、特にカリキュラム調整や財源の確保などに力を入れており、学生が留学を考えられる状況を用意できる様に努めている。現状では海外留学を希望する学生を派遣できるだけの準備がある。しかし、興味を持つ学生が増えるにつれ、その分の準備も必要になる事が課題となっている。

留学が難しい学生の為に、キャンパスで学びながら国際的な環境にいられるように、各国から留学生を受け入れることにも努めている。海外の協定校における職員の相互交流も重要だ

と考えて力を入れている。職員交流で協定校から職員が持ち帰る熱意やつながりは、説得力のある留学案内につながり、次に送り出す留学生に少なからず影響を与えている。

また、スウォンジー大学は常に近隣地域の経済と工業に関わり、ビジネス界とのつながりを大事にしてきた。海外の高等教育機関や多国籍企業とのパートナーシップを通して取り組む研究とイノベーションは、近隣地域の経済にも貢献すると考え、パートナーシップの質、量、規模の向上・拡大を目指している。

日々の課題は、取り組みたいこと全てには手が回らないので優先順位を明確に定めて、効果的な取り組み方を調整し、学内周知を徹底することである。そのためには、学内の情報交換を円滑にし、共通認識を持つことが大事で、上層部や他部署からのしっかりとしたサポートが全て揃って初めて、大学の総合的な国際化が実現すると考えている。

大学のブランド戦略と広報活動

University Brand Management and PR
Jacqui Bowen, head of Public Relations

スウォンジー大学のブランドは、大学が 100 年近く以前に地域産業を土台に設立された当初から形作られてきた。それは、大学が学内外関係者に、「大学や大学の活動について語るあらゆる機会に結ぶ約束のようなもの」と、スウォンジー大学では捉えている。このブランドが持つ存在意義は大きく、大学自身が下す決断に影響を及ぼしている。例えば、ベイキャンパス新設案が浮上した際、その計画があまりに革新的なので、実現可能なのかという意見が上層部から出たが、「果敢で明確なビジョン」「変化を恐れない」といったブランドイメージに応えるべき信念があったため、立ち止まらず前進するという決断を下すことができた。結果、ベイキャンパスは国内外から人材を集めるスウォンジー大学の目玉となっている。

ブランドについては、定期的に学内および学外から意見を集めるなどして審査するよう努めている。また、ウェブを活用した高等教育機関のブランド分析比較や、大学ウェブサイトのアクセス解析を行ない、また、ブランドに関する理解を深めるためのワークショップを開催するなどしている。

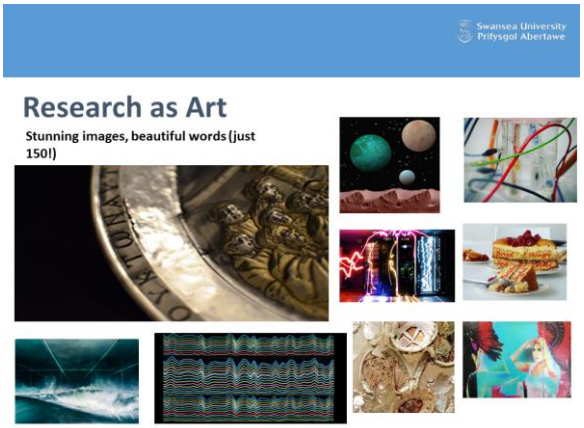
ブランドの価値、すなわちレピュテーションを上げていくために、どのようにして多数の競争者の中で際立つかは、常にチャレンジであり多くの努力を必要とする。メディアへの露出は非常に大切と考えており、単なるプレスリリースのみにとどまらず、ジャーナリストが求めるような新しいものを、タイミングよく事例や統計を沿えて世に出すよう努めている。また、メディアは常に複数あることを念頭に置き、地方紙から BBC ワールドまで全てにおいて何かしら取り上げられることを目指している。

今後は、コストがかからず市場が広いデジタルツールによる展開が求められているが、誰でも投稿できるシステムであることから、ブランドをどのように保護していくかなどマネージメント面において整備を要する。

研究のマーケティング活動

Marketing our Research
Emma Nehemiah, Research Marketing and Public Engagement Officer

スウォンジー大学の研究評価は、REF が発表される以前の 2008 年に行われた研究の質の全国調査 Research Assessment Exercise (RAE) 2008 では 52 位であったが、2014 年に発表された REF では 23 位に急上昇し、英国内研究大学のトップ 30 位以内にランクインした。また、REF では研究の影響力でラッセルグループの 11 の大学を抜いて UK 内 22 位にランクインした。



スウォンジー大学のリサーチ・マーケティングの担当者は 1 名。

マスコミと密接に連携しながら、世間一般にも分かりやすい、伝わりやすい研究成果のプロモーションと表現方法を追求している。その中で取り上げられたのは、研究を 1 つの画像（Image）と 150 文字で表現する“Research as Art Competition” というプロジェクト。たくさんの研究者からエントリーがあり、応募作品はポストカードに仕立てて配布したり、キャンパス内の廊下の壁等に研究成果の写真をパネルにしディスプレイしたりと活用している。プロモーションという観点でも大変有効だが、家族にやっと自分の仕事を知ってもらえる、と研究者の間でも好評だった。

スウォンジー大学では、研究者とメディアとの関わり方にも大変気を配っている。研究のメディアへの露出度を上げるため、研究のインパクトを最大化するため、メディアを最大限に利用するためにソーシャルメディアをもっと活用するようにと教員・研究者に呼びかけるだけでなく、BBC のレポーターを雇って研究者向けにインタビューの練習を行ったり、ソーシャルメディアの効果的な利用法に関するワークショップを実施したりして、研究者・教員が、自分自身や自分の研究を、自ら世間や国内外に売り込むためのトレーニングを実施している。これらの取り組みは文献の引用率(citation) を上げることにもつながっている。

また、アメリカ、インド、英国の利用者が多い THE CONVERSATION というウェブサイトには、ジャーナリストからではなく、研究者自身によるコメントが掲載されているが、これも最新の研究成果の宣伝になり、研究者同士で研究テーマを一緒に見つけていくきっかけにもなり、研究のプロモーションの有効な手段の一つである。

参考ウェブサイト:
THE CONVERSATION: https://theconversation.com/uk
https://theconversation.com/become-an-author

工学部における国際連携の企画とマネージメント

College of Engineering Case Study: Development and Management of International Partnerships
Dr James Holness, Director of International Collaboration, Engineering

スウォンジー大学の工学部は、革新的で学術的な研究を行っており、REF において英国国内のトップ 10 以内にランクインいる。産業界との結びつきも強く、ロールスロイス社との共同研究も行っている。学士課程では優れた教育が提供されており、卒業後の就職等、将来性に優れている。卒業生の 94%が就職または進学しており、就職した者の内 85%は 6 ヶ月以内に専門職または管理職に就いている。また、2015 年に新しいキャンパスへ移り、世界有数の設備を誇っている。

工学部の人員構成は、学生数約 4,000 名、大学院生数約 500 名、留学生は 70 ヶ国以上、160 名強の教育スタッフと 90 名強の支援スタッフとなっている。学士課程は、航空宇宙・化学・建築・電気電子・環境・材料・機械・医学と、学際的な構成となっている。大学院課程は、修士課程が講義主体の理系の修士課程(Master of Science(MSc))、理系の研究修士課程(Master of Science by Research(MScR))、研究修士号(Master of Philosophy(MPhil))、Master of Research(MRes)、博士課程が Doctor of Philosophy(PhD)・Engineering Doctorate(EngD)で構成されている。

工学部では、世界レベルの工学研究として、主に 3 つのテーマを掲げている。航空宇宙と製造業・エネルギーと環境・健康とスポーツである。これらの研究は、計算工学センター・材料研究センター・システムプロセス工学センターの 3 つの研究センターで管理運営されており、様々な研究グループと研究プロジェクトが進められている。

工学カレッジのあるベイキャンパスには、最新設備の教室や演習室、PC 教室や 800 席の多目的講堂がある。また、最新鋭の実験室、作業スペース、機器類も備わっており、革新的で世界レベルの工学設備である。

国際化のパートナーには、教育機関、政府・産業界・NGO 等のスポンサー、企業、政府機関が挙げられ、国際化のパートナーシップとしては、学生募集、学生・スタッフの留学・人事交流、研究、国境を越えた高等教育(TNE: Transnational Education）が挙げられる。教育機関とのパートナーシップは、工学部の戦略、または大学の戦略を考慮して決定される。パートナーシップの内容は、教育機関のタイプや提携の理由により様々であり、多方面に渡っている。最初の接触は、様々な取り組みやステークホルダーを通して行われ、リスク軽減のためにパートナーシップの内容が適切なレベルであるか精査される。パートナーシップの契約に際しては、工学部の国際化担当部長及び国際企画部門を中心に、パートナーシップ対象の視察の受け入れや先方への視察訪問を始め、詳細な信用調査の実行、大学内関連委員会への提案と承認、学長の署名等のプロセスを経て、プログラムの実行に至る。これらのプロセスには、短くても約 1 年間を要する。

パートナーシップの管理は、パートナーシップの種類によって異なる。基本合意書及び単位認定は国際企画部門によって管理され、その維持は工学カレッジと国際企画部門の視察によって行われる。なお、視察は、時折学長・副学長レベルのものも実施される。研究のコラボレーションは、個々の研究者及びグループによって、管理・維持される。戦略的パートナーシップは、国際企画部門によって管理・維持される。TNE は、国際化担当者によって運営され、工学カレッジの国際化担当部長によって管理される。その後新規のコラボレーションプログラム一覧に追加される。スタッフの海外研修プログラム“Flying Faculty” は工学部の幹部と国際化担当部長によって募集され、国際化担当部長によって管理される。新規の TNE の企画は、大学と工学カレッジの委員会の監督の下、国際化担当部長とコラボレーションプログラム部によって管理される。すべてのパートナーシップとコラボレーションは、工学カレッジの責任者・国際化担当部長・国際企画部門の責任者によって、監督されている。

理学修士コースの国際化に向けた持続的な工学の取り組みもある。これは学際的なチームと学外プロジェクトに基づいた理学修士のコースで、通常課程の学生と聴講生のどちらも受講できるように開講されている。この取り組みは、重要なものとして支援されており、全ての学科と留学生が受講でき、多面的なコラボレーションに基づくプログラムである。また、この取り組みは、工学カレッジと芸術・人文学カレッジとの学内コラボレーションであり、学外とは英国チャールズ皇太子の基金(the Princes Foundation) ともコラボレーションしている。他にも、スポンサー（産業界・NGO・政府機関・慈善団体）及び教育機関と、プロジェクトに基づいてコラボレーションしている。

4. 日本の大学が「国際化」を図る上で、特に役立つと思われた取組み、日本の他大学にもぜひ知ってもらいたいと思えた新規かつユニークな取り組み・方針等について

スウォンジー大学はウェールズ地方にあるため、学内の看板や掲示等が、英語とウェールズ語の 2 言語で表記されていた。この 2 言語表記が徹底されていること、デザインに違和感がないことは、日本の大学がキャンパス内の看板や掲示を多言語化（少なくとも日英）するに当たり、参考になる。また、2017 年に発表された英国国内大学ランキング(Good University Guide 2017) にてウェールズ地方約 30 大学の年間最優秀大学に輝いたことが至る所に掲示されており、これは在学生の愛校心・帰属意識を高めるような取り組みである。

ベイキャンパスでは、工学カレッジの建物内のメインの通路に面して、ガラス張りになっている実験室があった。その実験室は、研究内容をアピールするために、通行人に実験内容が分かるような展示がされていた。研究の現場をそのまま見せることは、（見られたくないところも見えてしまうリスクもあるが）強いメッセージを持って情報発信することになる。

また、Research as Art Competition というリサーチ･プロモーション活動は、見るだけでも楽しい絵葉書の様な成果物もあり、国際的な研究連携の推進や、大学の国内外へのアピールにも役立つものである。また、コンペティションにすることで、様々な研究分野から多くの数のエントリーを集める事

に成功したとのことで、とても印象に残った取り組みであった。

5. 報告者所感

私自身が普段関わっている業務は、学生交換プログラムや短期プログラムを通した学生の流動化(student mobility) の部分だけだが、質の高い研究はより良い教育につながるとコメントしていたスウォンジー大学のリサーチ・マーケティングについての取り組みを知り、自分の担当する教育プログラムをアピールする為に、普段自分が研究に関わっていなくても、ある程度は研究の紹介ができるようになりたいと思った。スウォンジー大学訪問は、大学の取り組む研究内容を世間一般に広く知ってもらうプログラムや大学を外向けにアピールするための方法・手段を考える大変良いきっかけとなった。課題は多いが、今後は、普段自分の関わっていない国際業務についても意識しながら、自分の担当業務を改善していきたい。

スウォンジー大学では、歴史のある建物を含む伝統的なキャンパスであるシングルトンキャンパスと、最新鋭の施設と設備を誇るベイキャンパスを見学した。この 2 つのキャンパスの共存が、ウェールズ地方という英国において歴史と伝統を持つ地域での今後の大学のあり方としてチャレンジしていると感じた。また、広いキャンパスにも関わらず多くの学生がおり、図書館は空席がほとんどない位に学生が自習していること、ラウンジ・学生ホールに相当するような場所も学生で賑わっていることなど、施設・設備だけでなく、キャンパスライフを楽しんでいる様子をうかがうことができた。ハード面・ソフト面、それぞれの取り組みやサービスを検討して高めることは大切だが、学生にとってはそれらが総合的に感じ取られ、満足度や帰属意識に影響することを実感した。

（報告担当：山崎、御幡、横田）

The University of Nottingham **16 November 2016**

1. 大学の概略

イングランド中央部ノッティンガムにある国立大学。1881 年に市民のためのカレッジとして始まり、現在英国でドラッグストアを展開している Boots 社の祖 Jesse Boot 卿より土地の提供を受け、1928 年には現在のキャンパスの様相を呈する“University Park”ができあがった。湖を抱え、スポーツセンターや多くの学内学生寮も充実したキャンパスの広さは英国内でも最大規模である。現在、人文系・自然科学系を網羅する総合大学であり、英国の大規模研究重点型大学 20 校で構成するラッセル・グループに所属しており、創設メンバーでもある。英国国内に主要 4 つのキャンパスと大学病院を置き、中国およびマレーシアにもキャンパスを持つなど精力的に海外派遣・受入れを行っている。QS 社の世界大学ランキング 2016-2017 では第 75 位にランクインしている。

2. 訪問スケジュール

10:00	歓迎の挨拶 Professor Nick Miles OBE,PVC Global Engagement
10:10	アジア地域の留学生受け入れと協定に関する戦略について Michele Clarke,APVC(Global Engagement) Asia-Pacific
10:25	国際戦略の展開と実施について John Quirk, Director of International Office
11:10	国際的研究と REF について Steven Hardy, Head of Research Outcomes
11:30	広報とレピュテーションマネジメント Tim Utton, Deputy Director of Communications, Faculty of Registrars
12:15	昼食およびキャンパスツアー
13:50	教育交流協定および留学プログラムの展開とマネジメントについて Helen Foster,Associate Director (lead for teaching Partnerships) Gail Armistead,Associate Director (lead for Study Abroad & Exchange)
14:40	ネットワーキングイベント 1
15:10	休憩
15:25	ネットワーキングイベント 2
16:15	留学生支援について Rebecca Van Der Steen, International, Faith & Cultural Group Co-ordinator (Student Union)
16:45	結びの言葉 John Quirk,Director of International Office

3. 発表要旨

アジア地域の留学生受け入れと協定に関する戦略について

Asia Recruitment and Partnership Strategy
Michele Clarke, APVC(Global Engagement) Asia-Pacific

APVC (Global Engagement)
Asia-Pacific
Michele Clarke 氏

アジア大洋地域の各協定（大学間、大学と企業間、大学と公共機関間など）に関する活動リーダーである Michele Clarke 氏より、アジア太平洋地域の留学生受け入れと協定に関する戦略について説明があった。ノッティンガム大学は、アジア太平洋地域の国際な取り組みとして、3 つの目標を立てている。

一つ目は、全ての学生に、高品質の国際教育を提供することを目標としており、協定校との間に様々なプログラム（学位取得を目的としたプログラムや学期期間のみのプログラムなど）を設けることで、学生に国際教育を提供する取り組みを行っている。二つ目は、国際的な協定を強化・増加させることで、世界的な影響力を強めることである。そのために、多くの大学や産業界などと連携する取り組みを行っている。三つ目は、国際的な取り組みや同窓生との繋がりといったポートフォリオを強化することである。同窓生との連携を強化することにより、インターンシップの機会を増やし、キャリアパスを発展させる機会を学生に与えている。

ノッティンガム大学は、英国国内の大学で留学生数が 4 番目(2013/14 年 HESA のデータによる)に多く、留学生満足度(Study Portals International Student Satisfaction Awards)で 2 位を受賞しており、産業界との連携やアジア太平洋地域の大学との具体的な協定内容について、以下のとおり紹介があった。

産業界との連携について、ヨーロッパで最も大きいバイオ分野（薬剤や医学など）の研究拠点施設のバイオシティや、グラクソ・スミスクライン社（グローバル製薬企業）と連携して設立したカーボンニュートラル研究所があげられる。カーボンニュートラル研究所は、自然な素材、再生可能なエネルギー（太陽光発電など）のみで建設されており、グリーンケミストリー分野向けの施設も兼ねており、新しい薬学部の設置も計画している。また、ロールスロイス社との連携によるトレーニングセンターのロールスロイス UTC もあり、産業向けの博士課程プログラムを行っている。

アジア太平洋地域の大学との連携については、タイのタマサート大学で、工学分野のプログラムを提供しており、2 年間 タマサート大学、2 年間ノッティンガム大学で教育を提供している。また、中国の天津大学では、漢方薬分野(traditional Chinese medicine)で、1、2 年を天津大学、3、4 年をノッティンガム大学で学ぶプログラムとなっている。最後の 1 年を中国の病院で実習する 5 年間のプログラムとなる。また、オーストラリアのアデレード大学では、農学分野の博士課程プログラムを行っている。

国際戦略の展開と実施について

Development & Implementation of corporate International Strategy
John Quirk,Director of International Office

Director of International Office
John Quirk 氏

ノッティンガム大学の国際戦略の経緯と現状や目標について、国際部長の John Quirk 氏から紹介があった。概略としては、現在国際オフィスでは留学生募集やスタッフ育成、エージェントとの連携を含め多くの業務を担当していており、約 50 名のスタッフが英国、インド、ガーナ、中国、マレーシアの 5 か国で所属している。先の発表でもあったように、現在 1 万人の留学生が在籍しており、74 社の留学エージェントにより、6,000 もの出願を取り扱っている状況である。年に 120 回ほど大学紹介のブースを出展するなど、国際的な取り組みに力を注いでいる。収入としては運営費として年間 90 万ポンド、そのうち 6.7 万ポンドを奨学金として還元しており、この額は英国国内でも最も大きなものとなっている。この運用も国際部で行っており、他にもエラスムス（EU 諸国における学生交流の促進を目指す計画）事業や IELTS を実施するなど、多岐に渡る業務を担っている。

国際部での 2020 年までの目標としては、留学生数を全体の 35%（現在より 2,000 人増）までに引き上げること、そのためには今よりもより多くのパートナーシップ構築が必要である。また、英国国内キャンパスの学部学生のうち 30%を学位プログラムの一環として海外に派遣すること、また大幅な増額であるが、年間収入を 150 万ポンドへ引き上げること打ち出している。ノッティンガム大学への留学生数を表したグラフからは、英国政府が学生ビザ発行などの方針

を変更し始めた 2014 年に下降したが翌年には持ち直し、英国全体の留学生受入れ数と比べても、今後平坦な推移をたどる予測であり、その中でどう留学生の数を増やしていくか、成長していくかがキーポイントとなる。

マーケティングプランとしては、海外の学校や大学機関にさらに積極的に出向き、毎週誰かスタッフが海外にいるような状況である。そういった際に心がけているのが、教員など研究分野の人員を動員することである。事務職員が学生の研究に対するニーズを聞いても、学術的分野に的確なアドバイスはできないからである。同時に、こうした学生募集に関して留学エージェントの開拓も行っており、昨年は留学エージェントを通して出された 750 の出願数が、今年は数千に上った。日本などの教育背景についても詳しいため、予備教育にも力を入れており、Kaplan（大手教育会社）とのパートナーシップにより、大学進学準備コースや大学院進学準備コース、英語力強化コースなども実施している。また、マッチングを重視してノッティンガム大学を意欲的に選んでもらうため 2015 年 11 月から始めた、合格者に電話をかけたりメールを出したりする「学生コールキャンペーン」は、回答者のうち 7 割が好反応を示す大変意義のある成果を出している。

次に、奨学金制度についてだが、2001 年に設立された、“Developing Solutions Scholarship” はノッティンガム大学の大学院留学生向け基幹奨学金プログラムとなっており、主に発展途上国の優秀な学生を支援している。100 名ほどの授業料免除を行い、支援を行っている国は主にアフリカからが多い。82%の学生はみな何かしらの奨学金を得て勉学に励んでいるという推測している。近年はチーヴニング奨学金やグラクソ・スミスクライン社などとパートナーを組み経済支援を行うなど多くのルートがあり、そういった学生が多く学んでいることは、ユニークなセールスポイントになる。

人材要員として特徴あることは、卒業生研修プログラムというものがあり、在学中優秀であり、意欲的な学生を対象に 2 年間のプログラムを行い、学生のうちから将来の職員を育て、プログラム終了後は終身雇用となる。なお、選考通過後のプログラム中は有給である。

最後にランキングについて報告され、公式なものではないが、刊行物等のデータから、イギリス国内では 20 位前後となっている。世界ランキングではタイムズ・ハイヤー・エデュケーションで 147 位、QS 世界ランキングで 75 位である。約 30%の学生がランキング等で大学を決めることを鑑みると、重要なデータであるとのことだった。

国際的研究と REF について

International Research & REF
Steven Hardy, Head of Research Outcomes

Head of Research Outcomes
Steven Hardy 氏

世界レベルの研究力を掲げるノッティンガム大学の研究活動の取り組みと Research Excellence Framework(REF)について、Steven Hardy 氏から説明を受けた。

研究戦略について

ノッティンガム大学は、「研究の質・量において世界レベルの研究力を誇る大学」という評価を得ることを目的とした、ノッティンガム大学研究戦略 2015-2020 (The University Research Strategy 2015-2020) を現在展開している。この戦略では、大学の強みに基づいて導き出された文化とコミュニケーション、デジタルの未来、健康と充実した福祉、持続可能な社会、技術革新の 5 つの重点研究テーマ(GRTs: Global Research Themes)を設定し、研究活動の核としている。更に、この 5 つの領域の少なくとも 1 つの領域と関連性を持つ 31 の優先的研究領域（RPAs: Research Priority Areas）を設定して、同大学が推し進めていく研究テーマを設定している。各優先的研究領域は専門の異なる研究領域が結びつくため、それぞれが学際的な研究となり、研究戦略の推進力となることが期待されている。（例えば、持続可能な社会と、健康と充実した福祉の 2 つの領域の共通テーマ「農業と食の安全」が優先的研究領域とされており、文化とコミュニケーション、デジタルの未来、健康と福祉の 3 つのテーマからは、「データ駆動型の発見」という優先的研究領域がそれぞれ導出されている。）

研究戦略を支える資金について

同大学の研究力は REF において、英国で第 8 位の評価を得ている。REF はイギリスの 4 つの資金配分機関が、英国の大学の研究力を評価する際に用いている指標である。この指標の結果に基づき、これらの資金配分機関から毎年およそ 20 億ポンド（約 2900 億円）が配分される。同大学も年 5000 万ポンド（約 72 億円）を獲得しているとのこと

であった。研究成果物は、引用回数や相対被引用インパクト（FWCI: Field-Weighted Citation Impact）によって評価されるが、日本の研究者との共著論文は、非常に高い評価を得ることができるとのことであった。[1]

現状と目標について

研究力の評価において、同大学の現在の REF の順位は、現在 8 位であるが（なお 1 位は UCL、2 位は University of Oxford、3 位は University of Cambridge）、将来的にはこの順位を英国で 5 位、世界ランキングにおいてトップ 60 位以内に入ることを今後の目標にしている。

広報とレピュテーションマネジメント

Public Relations and Reputation Management
Tim Utton, Deputy Director of Communications, Faculty of Registrars

Deputy Director of Communications, Faculty of Registrars
Tim Utton 氏

渉外部門のコミュニケーションズチーム 副課長である Tim Utton 氏より、渉外部門の構成や目標について説明があった。また、渉外部門にあるコミュニケーションズチーム（Communications)の詳細やリピテーションマネジメントの実例紹介があった。

渉外部門の構成および目標について

コミュニケーションズチーム (Communications)、留学生募集チーム(International Student Recruitment）、マーケティングチーム(Marketing)、マーケティング分析チーム（Market Intelligence）、ノッティンガムレイクサイドチーム（Nottingham Lakeside Arts）、管理チーム（Operations）、および 広報業務チーム（Public Affairs)の 8 つのチームからなり、総勢 210 名のスタッフで構成されている。そして、以下の 5 つの目標を掲げている。

大学の評価とプロファイルを再定義(re-position)し、学生の数と質の目標達成のため、ターゲットする学生を引きつけ、大学へ入学させる。また、大学の研究テーマとの連携を向上させ、視覚化することで大学の評価を高め、大学のスタッフと学生間といった内部的なコミュニケーションを発達させる。また、高品質で効率的、革新的なマーケティングや活動を行うために渉外部門を発達させるといった目標下、運営されている。

コミュニケーションズチーム（Communications)について

Tim Utton 氏が副課長を務めるコミュニケーションズチームは、メディアへの発信、専門的なアドバイス、メディア（テレビやラジオ）への情報提供やメディアトレーニングなどを行う Media Relations チーム、学生、スタッフおよび同窓生がコミュニケーションを取れるコンテンツを提供する Internal Communications チーム、近年新しい Web サイトを立ち上げており、研究者の紹介、研究内容や研究に関するインタビューなどを掲載する Research Communications チーム、SNS のコンテンツ提供を行う Digital チーム、ウェブサイトを担当し、年間で 280 万のセッション、1 日で 60,000 ページビュー数を獲得している Web チームで構成されている。

地域や国内外からのノッティンガム大学に対する評判とプロファイルを、プロモーションし、またそれを守ることを主な仕事としており、具体的には、ポジティブな報道を確保する、世界的な研究をプロモーションする、教職員、学生、同窓生の支持を促す、高性能で、多目的なデジタルコンテンツを提供する、高品質のウェブサイトを提供する、評判を守る、ノッティンガムのブランドを強めること、などを行っている。

レピュテーションマネジメントの実例紹介

レピュテーションマネジメントの実例として、評判を最大化した事例および被害を抑えた事例の紹介があった。評判を最大化した事例

→ 1000 年前の療法が、MARS に効果的であるという研究結果について、テレビ、ラジオや SNS などの各種メディアを駆使することで、研究の評判を最大化した。全世界で、各種メディア合わせて、460 万のシェアがあった。

---

1 FWCI＝Field-Weighted Citation Impact （相対被引用インパクト）：文献当たりの被引用率を、出版年・分野・文献タイプが同じ文献の世界平均で割ったもの。研究の「質」を示す。

被害を抑えた事例

→カーボンニュートラル研究所 の火事。2014 年 9 月 12 日に、グラクソ・スミスクライン社（グローバル製薬企業）から資金を得て、建設中のカーボンニュートラル研究所で火事が起き、全焼。200 万ポンドの損害を受けた。しかし、適切なメディア対応をすることで、被害を抑え、2016 年に再建設をすることができた。

教育交流協定および留学プログラムの展開とマネジメントについて

Development & Management of Overseas Partnerships and Study Abroad
Helen Foster,Associate Director (lead for teaching Partnerships)
Gail Armistead,Associate Director (lead for Study Abroad & Exchange)

国際部にて教育交流協定 (Teaching Partnership)を担当する Helen Foster 氏から、ノッティンガム大学の教育交流協定の現状と業務内容について説明を受けた。

Associate Director (lead for Teaching Partnerships) Helen Foster 氏

ノッティンガム大学における協定は、教育(Teaching)、研究(Research)および学生交流 (Exchange (= Student Mobility)) の 3 種に大別される。そのうち、Teaching Partnership は、ジョイントディグリープログラムやデュアルディグリープログラムなど、学部生および大学院生の履修プログラムに関する協定である。2015 年現在は 85 の教育交流協定 (Teaching Partnership) を締結しており、この協定に基づいてノッティンガム大学に在籍している留学生数は、1,121 人であるとのことであった。留学生のほとんどがアジア圏からの学生であり、全体の 35%をも中国からの留学生が占める。留学生の専攻は社会科学がもっとも多いとのことであった。協定の中で最大のものは、キャンパスを設置している中国とマレーシアであり、これら 2 つを除くと小規模な協定を多数締結しているとのことであった。

国際部の業務には、協定の運営管理、協定候補の新規開拓、協定締結に関する戦略の策定、協定草案の作成における関係組織との連絡調整、デューデリジェンス (due diligence) の確認、各種資料、パンフレットの作成などがあるとのことであった。このうち、ノッティンガム大学国際部では協定候補の新規開拓について特に注力しており、国際部の職員の業務量の相当部分を占めるとのことであった。これは、ブリッティッシュ・カウンシルの調査等から、協定を通じて英国へ留学する学生が多いことから、英国にとって非常に重要な業務であるとの認識に基づいている、とのことであった。

Associate Director (lead for Study Abroad & Exchange) Gail Armistead 氏

続けて、同じく国際部において、学生留学業務（Study Abroad & Exchange ）を担当する Gail Armistead 氏から、ノッティンガム大学の学部生および大学院生の、海外派遣支援についての取組みについて説明を受けた。

同大学では、2020 年までに全学生の 30%を留学させることを目標としており、現在は毎年 200 人の学生が海外で学んでいるとのことであった。

Gail Armistead 氏が、学生流動の拡大のために注力していることは2つあり、1 つが資金獲得であり、もう 1 つが異文化理解の涵養（Developing Intercultural Awareness) であるとのことであった。

まず資金獲得についてであるが、同大学に在籍する学生は、低所得層の家庭出身の者が 1/3 を占めているため、そのような学生を支援するために、大規模な資金調達を行い、学生の留学奨学金の原資としているとのことであった。この取組は、「留学の機会は全ての学生に手の届くものであるべきである」という理念にもとづいて行われているとのことであった。資金提供者は、銀行から個人の寄付者まで幅広い範囲に及ぶとのことであった。

また、異文化理解の涵養としては、学生に国際的な経験や視点の気づきを与えるプログラムが、国際部の職員により実施されている。内容は、留学前および帰国後の学生へのフォローレクチャー、同大学が開発したソフトウェアで提供される留学中の学生への遠隔授業、および Skype でのカルチャーショックのケアの実施といったものであった。

留学生支援について

International Student Support
Rebecca Van Der Steen, International, Faith & Cultural Group Co-ordinator (Students' Union)

International, Faith & Cultural Group Co-ordinator (Student Union) Rebecca Van Der Steen 氏

主に留学生に対してどのようなサポートを学生組合（Students' Union）が行っているか、国際・信仰・文化グループコーディネーターの Rebecca Van Der Steen 氏から紹介があった。学生組合は大学からは独立して運営がなされている。「物事を行い、助けを得、変化を起こす」ということを方針としており、勉学が最優先なものの、学生たちがそれ以外で充実した学生生活を送れるよう支援している。現在 70 以上の文化活動があり、35 ほどのクラブ活動と、12 の信仰クラブがある。それぞれが単体で活動するのではなく、その団体を通じて様々な文化や世界と交流できるよう、多くのイベントも企画実施されている。例えばマレーシア・ゲームというイベントには 9,000 人もの動員が英国全土からある。そういった大きなイベントから、映画鑑賞など小さなイベントも行われている。

また、様々な語学習得や、勉学のサークル、コーランを解読するなど、多様多種な活動がある。それらはすべて学生の、学生による活動とのことである。また、特に留学生は初めての英国での生活で経験するカルチャーショックなどを乗り越えられるよう、学生同士で助け合えるようなトレーニングもある。留学生にとって安心するのは、自分の親しみのある言語で会話ができることでもあると考え、そういった場も大切にしている。「故郷の味 (Taste of Home) 」という催しイベントも行っており、20 ほどのグループが主催して飲食店を出店したりしてそれぞれの国の文化を披露し体験してもらうというイベントである。直接話し合うだけでなく、ソーシャルメディアを使ってでも、福利厚生について、住居について、コミュニティに対する懸念など、大いに意見を出しやすいようにしている。聖職者とも密に連携をとっており、学内で信仰グループへのサポートやそれに関わる活動のサポートをしてもらっている。

多くのイベントを企画しているが、主体は学生なので、学生組合としては安全面の指導をしたり、経済的な支援を行うなどし、そこにミスマッチがないかにも注意を払っている。同時に、彼らが自分自身で外部の経済援助を受けることを奨励もしている。そうすることで、単年のイベントではなく、翌年以降も続く継続的なイベントが望める。ストーン・ヘンジへの小旅行や、休暇中帰省しない留学生向けへのイベントを企画したりなど、つながりを保てるよう努力している。また、学生の家族にたいしても語学レッスンなどのサポートを行っている。こうした活動では、留学生向けだけでなく、英国出身の学生にも積極的に関わり交流をもってもらうようにしている。それらの活動が、この多文化なキャンパスを活気づかせている。

4. 日本の大学が「国際化」を図る上で、特に役立つと思われた取組み、日本の他大学にもぜひ知ってもらいたいと思えた新規かつユニークな取り組み・方針等について

【卒業生研修プログラムについて】

自大学の優秀な学生を採用する卒業生研修プログラムというものに大変感銘を受けた。大学院生への就職の門戸を開くことにもなり、また優秀な人材を獲得する重要な機会となる。学生生活をこのように国際的なキャンパスで送った人材は、やはり国際化に興味を持っていることが多いと思われ、そうした取り組みが学生及び職員を育てていると感じた。

【Globelynx media hub について】

広報とレピュテーションマネジメント（Public Relations and Reputation Management）のプレゼンの中で、紹介があった。ノッティンガム大学は、Globelynx media hub というメディア発信のための施設（部屋）を学内に保有している。部屋にはカメラが設置されており、テレビ発信およびラジオ発信が地域、国内外に向けて可能である。また、本施設を利用して、メディア発信のための事前計画やトレーニングも行っているとのことだった。大学内に、国内外へのメディア発信できる施設が整備されているのは印象的であり、大学の評価向上につながるメディア発信をうまく利用することを重要視していることが感じ取れた。

【研究成果と卒業生ネットワークについて】

ノッティンガム大学は、総合研究大学として国際的に非常に高い評価を得ている大学である。その研究成果を統括する担当者が、同大学の国際的な研究活動に関する統計データとして、海外大学との間に 300 以上の連携関係がある

ということに加えて、世界中に 25 万人以上の卒業生がいることを挙げられていた。研究成果に関連して、海外大学との連携のほかに、卒業生とのネットワークを重視する理由として、世界各地で活躍している卒業生の研究活動から、同大学において国際的な共同研究が生まれているとのことであった。多様な国々から留学生が入学し、彼らが卒業して世界各国で活躍する。それが大学の国際的な活動を生み出すきっかけとなり、大学をさらに魅力的なものにして、また多様な国々の留学生の入学を促すという好循環が生まれているのではないかと思われた。

5. 報告者所感

【ノッティンガム大学全体の印象】

歴史が古いながらも、キャンパスが広大で新しいものと古いものがほどよくミックスされたオープンな大学だと印象に残った。病院やスポーツ施設が充実しており、学生の福利厚生にも力を入れていることがうかがえた。キャンパスツアーでは敷地が広いため私たちのために手配されたバスで移動して各施設を丁寧に説明してもらいながら巡ることができた。国際色が豊かであると同時に、宗教的なことも重要視していて、やはりそこは文化的な背景があるかと思い、日本で国際化を図るうえでは、そういったことも重視していく姿勢を学んだ。

ネットワーキングイベントでは、ノッティンガム大学に留学している日本人学生が集まってくれており、この大学を選んだ理由や学生生活の様子などを直接訊くことができた。

イギリス国外から来た学生たちにカルチャーショックの軽減や不安をあまり感じないようにと企画されるイベントの数々を練る大学の土壌は、卒業する頃にはその彼らが「第二の故郷」とまで呼ぶようになれるほど慣れ親しめる環境ではないかと感じた。

国際化への積極的な戦略や姿勢、具体的な数字の打ち出しなどが印象的だった。また、訪問した私たち一人ひとりの個人名付きの資料を用意してくれていたり、ネットワーキングイベントでは日本とつながりのある教授や参加した私たちの大学と近い研究分野の教授など多くのスタッフが集まってくれていたりなど、ホスピタリティーあふれる訪問だった。

【仕事の進め方】

海外協定、研究推進やブランディングなどに対して、戦略を作成し、それを具体的に遂行していっていると感じた。特に、ブランディング関係の部署が、メディア、Web やデジタルなど様々なチームがあり、多くの人数を割いており、ブランディングに力を入れているのは印象的だった。

また、ネットワーキングの中で、スタッフに国際化やブランディングの戦略についてはどのように実行しているのかと聞いたところ、教員が、戦略を決め、プレゼンや冊子などで、スタッフへ戦略に対する共通認識を持たせて、スタッフが具体的な内容にブレイクダウンし、実行しているということだった。教員ともメールのやりとりで済ますことが多いという話を聞いて、仕事の進め方の違いに驚く部分もあった。英国と日本では、仕事の仕方の違いが元々あり、英国の内容をそのまま活かすことは、難しいかもしれないが、見習うべき点が多々あると感じた。

【国際的な研究活動の支援】

ラッセル・グループの構成校であること、そして、QS 社の世界大学ランキングにおいて 70 位にランクインしていることから、訪問前から研究大学の印象が強かったノッティンガム大学であるが、実際に研究活動および研究支援に関する説明を受けて、同大学が研究成果の向上のため積極的に様々な取組みを展開していることを知ることができた。
2014 年 REF(Research Excellence Framework)におけるランキングの向上を最終的な目標として、海外大学との連携、卒業生ネットワークの維持、海外大学・機関との共同研究による研究成果が生み出すインパクトの分析、学内研究者・大学院の研究活動に対する報奨金もしくは奨学金の支給など様々な施策を実施していた。

研究活動は教員の主導する領域ではあるものの、教員が研究活動と並行して上述のような施策を実施することは困難であることから、職員がこのような取組をより積極的に行い、国際的な研究活動の展開を支援していく必要があるだろうと思われた。また、このような取組を行うためには、職員の専門性の向上など職員の高度化も必要であろうと感じた。

（報告担当：加藤、平山、森永）

1. 大学の概略

シェフィールド大学は 1828 年に設立されたシェフィールド医学校が母体となり、芸術を専門とするファース・カレッジ(1879 年設立)、工学関連を取り扱うシェフィールド技術学校(1884 年設立)の 3 校を統合して、1905 年に設立された。現在分子生物学の教育研究施設として用いられているファース・コートは、ファース・カレッジの創設に重要な貢献をした鉄鋼業者のマーク・ファースを記念し、1905 年に建設されている。現在の学生数は約 27,000 人、男女比はほぼ 1:1 で、約 7,000 人が 140 カ国から留学している。特に中国からの留学生が多く、2016 年の時点で 3,100 以上を数える。

ラッセルグループの構成校であり、これまでに大学関係者から 6 人のノーベル賞受賞者を輩出している。また、工学で高い評価を得ており、ボーイングやロールスロイス、ウェルカム・トラスト（英国に本拠地をもつ医学研究支援等を目的とする公益信託団体）などと協力し研究を進めている。リサーチパークも比較的近くに立地しており、研究者や学生の往来も盛んである。REF では、英国の全大学のうち 14 位、ラッセルグループの中で 11 位という結果を残しており、上位 10%に位置している。

人文学、工学、医歯薬学、理学、社会科学、国際部門(ギリシア・テサロニキに拠点があり経営学、心理学など 4 学科を現地で運営) の 6 つの学部組織を持ち、82 の研究拠点や研究所を設置している。教員一人当たりの学生数は 14.7 人となっている。また、学生へのサポートにも力を入れており、Student Union とよばれる学生自治会はイギリス国内 1 位の評価を得ている。

最新の各種大学ランキングの結果は以下の通り

Times University Guide 2017 年　第 24 位
Guardian University Guide 2017 年　第 41 位
Complete University Guide　2016 年　第 27 位
QS World University Ranking 2017 年　第 84 位

上：シェフィールド大で最も古いファース・コート中庭
左：1945 年のノーベル生理学・医学賞受賞者 Lord Florey
ペニシリンの抽出により授与　1931-1935 に在籍

2. 訪問スケジュール

10.00 – 10.30	シェフィールド大学の紹介と大学の国際戦略 Joanne Purves, Director of Global Engagement
10.30 – 11.00	大学ブランディングとレピュテーション・マネジメント Annie Goss, Head of Media and PR & Carrie Vernon, Head of Marketing
11.00 – 12.00	キャンパスツアー
12.00 – 12.30	留学生サポート Audrey Leadley, Head of Student Support and Guidance
12.30 – 13.00	留学生募集 Hannah Stelman, International Officer

13.00 – 14.00	ネットワーキング (Joanne Purves, Annie Goss, Audrey Leadley, Richard Simpson, Dr. Thomas E. McAuley, Hannah Stelman, Dörte Stevenson, Sara Qutub, など)
14.00 – 14.30	英語教育センター Richard Simpson, Director of ELTC
14.30 – 15.00	留学生のキャリアサポート Judy Everett, Careers Adviser
15.00 – 15.30	大学間協定の開拓と維持 Dörte Stevenson, Head of Global Opportunities & Exchanges and Acting Head of International Partnerships
15.30 – 16.00	ジョイントプログラム Karen Anderson, Quality Manager
16.00 – 16.30	質疑応答

3. 発表要旨

大学の国際戦略

Welcome and introduction to the University &overview of Internationalisation strategy
Joanne Purves, Director of Global Engagement

#WeAreInternational キャンペーンの頒布物

留学生が全体の 1/4 を占めており、キャンパス内の多様性は高く保たれている。特に中国、マレーシア、ナイジェリア、サウジアラビア、インドからの学生が多い。日本からの学生は 52 名と比較的少ない。キャンパス内に限らず、地域社会全体の多様性向上にも貢献しており、Global citizenship の涵養に努めている。

国際戦略は大学全体の戦略と連携している。大学の成り立ちが市民や企業家の寄付によるものであるという歴史があるため、地域社会への成果還元や企業との連携にも積極的に取り組んでいる。提携の相手先は地域への貢献という意味から近隣に拠点を持っていることも考慮に入れるが、重要なのは大学が行なっている研究内容と連携の内容がうまく噛み合っているかという点である。現在はジーメンスやボーイングといった英国外の企業とも産学連携プロジェクトを進めている。大学とのパートナーシップでは、シェフィールド大学のレベルと釣り合う研究成果を出しているかを精査し、主要なパートナー機関を設定している。さらに、研究費の提供元の開拓も国際戦略の大きな柱の一つとして考えている。EU が拠出する研究費が大学研究予算の大きな部分を占めているため EU への働きかけを行う必要があり、他の大学とコンソーシアムを組み、ブリュッセルに事務所を開設している。

加えて、部局、Student Union など学内の様々な組織が緊密に連携を取るよう心がけているとのこと。例えば留学生が卒業後サバティカルとして Student Union での勤務を行う仕組みを設けることで、新しくやってくる留学生が感じるハードルを低くすることができるという。

研究に関しては注力すべき主要分野を設定し、国際競争力を高めることに努めているほか、世界から優秀な研究者を集められるよう戦略を構築している。シェフィールド大学の研究者が発表する研究成果のうち 40%が国際共著論文であるため、スタッフも世界から採用する必要に迫られている。

大学は卒業生に対して、寄付のみでなく、在学生へのメンタリングやキャリア支援など様々役割を果たすことを期待している。海外で職を得ている卒業生は特に重要視しており、現地の状況把握や大学が行う調査への協力を依頼することもある。

ユニークな広報活動としては、シェフィールド大学の名称を出さずに英国大学全体のプロモーションビデオを制作し、英国でのイニシアティブの獲得を目指すキャンペーンを行っている。(#WeAreInternational)

大学ブランディングとレピュテーション・マネジメント

University branding, reputation management and PR
Annie Goss, Head of Media and PR & Carrie Vernon, Head of Marketing

Ms. Annie Goss and Ms. Carrie Vernon

大学本部で渉外やマーケティングを担当するスタッフは 35 名おり、マーケティング、メディア対応、渉外、学内向け広報、デジタルチーム（SNS やデジタルマーケティングを担当）の 4 つのチームに分かれて活動している。大学本部の他にも学部や研究所、研究プロジェクトで渉外関連業務を担当するスタッフや、学生募集に関わるスタッフも別の部署に配置されているため、学内全体では 100 人以上がマーケティングと渉外関連業務に携わっている。

シェフィールド大学が端的にどういった大学であるかを伝えることを念頭に入れ、ブランディングイメージを策定した。モットーを'To Discover and Understand'と定めた他、紋章の図案も統一し、ロゴやデジタルコンテンツで用いる場合の簡略化された図案も定めている。さらに学内にブランディングを徹底させることを目的とした、学内者向けサイトも用意し、定められた図案やロゴを利用しやすいよう便宜を図っている。課題としては、外部の業者がブランディングポリシーから外れた図案を用いたグッズを作成、販売した場合の対策が難しい点が挙げられる。

ブランディングで定めた紋章やロゴの図案

英国の大学評価の中で研究のインパクトが占める部分は大きいため、研究成果の広報は特に重点的に行なっている。ロビーイングや様々なステークホルダーとの交渉を有利に進めていくには大学自体の価値を高めていく必要がある。良い影響力を発揮し、一流企業や大学との関係を構築するためにも活動の社会的インパクトを発信し続けていくことが重要である。例えば、公衆衛生関連でレジの近くに置いてある菓子が健康にどのような影響を与えるかという研究成果を広報した際には、The Guardian などのメディアに取り上げられ、実際に全国チェーンのスーパーマーケットのレジ周辺で、その菓子が陳列されなくなるという現象が生じた。

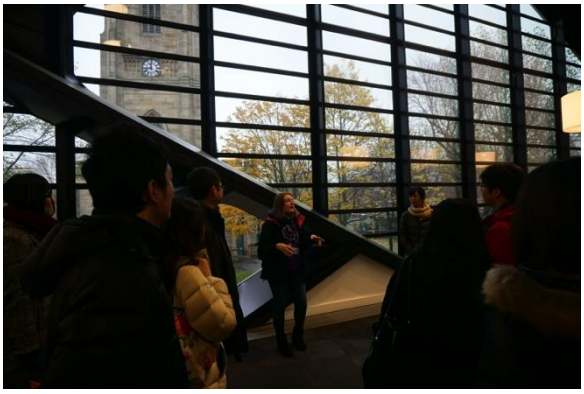
研究成果に限らず、情報発信を行う際には目標としている国、地域、層を定め、最も届きやすい手段を考慮する。News-ready なプレスリリースやインフォグラフィックの作成、印象的な画像や動画の準備も効果的である。COP や大統領選挙など、あらかじめ大きなイベントの予定が把握できている場合は、コメント可能な学内の研究者を調査し、ジャーナリストに情報を提供することもある。その際に研究者がメディア対応に慣れていないようであれば、基本的な注意点のレクチャーや模擬インタビューを含む「メディア・トレーニング・プログラム」を行う。このプログラムは全ての学部で研究者や大学院生に定期的に提供されている。研究成果に限らず、こうした広報活動ではつい誇張してしまうこともままあるため、その対策としてどの程度の表現までは許されるか、どういった文言は避けるべきかといった内部ルールを設けている。このルールは本部だけではなく学内の担当者まで浸透している。

レピュテーション・マネジメントは大学の価値を維持していく上で必要不可欠だが、日常的な事案は様々であり、その対応策は必須である。それほど悪い影響が無かった場合でも記録し、その後の影響を定期的にチェックすることで大事件へ発展することを避けられる。事前に準備できることとしては手順の作成、いざという時の対応者やコメントをあらかじめ想定しておくことなどが挙げられる。もし対応が必要な事件が起こった場合は迅速に行動し、SNS の監視は欠かさず行うこと、静観はせず積極的に議論に加わり、誠意を見せることが必要である。これらの作業を落ち着いて行うためには、前述のような流れと対応をシミュレーションして準備をしておくことが、良い対策になる。

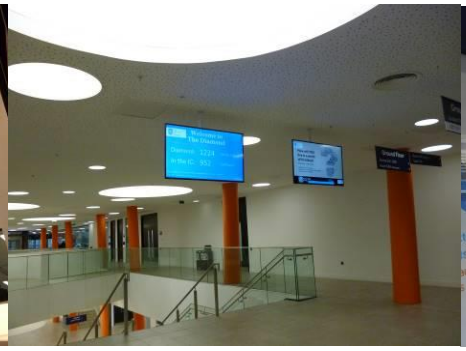
キャンパスツアー

Student Ambassador を務めている学生の先導により、大学内施設を見学。

最も古い Firth Court は分子生物学の施設



図書館はキャンパス内に複数あり、24 時間年中無休



工学部の建物は近年改装され、設備が充実

Student Union 建物内

留学生サポート

International student support
Audrey Leadley, Head of Student Support and Guidance

渡英する留学生に対し、オリエンテーションの開催など様々なサポートを行っている。渡英前にはチャットを用いた相談窓口を開き手軽にアドバイスを求めることができるように体制を整えている。

在学期間中は定期的にイベントを行うことで、サポートを行っている。毎週火曜の夜にはアカデミックな英語ではなく、地元特有の言い回しやジャーゴン、習慣をレクチャーする機会を設けている。この会にはイギリス国内出身の学生も参加しており、留学生にとっては友人を作る場として重宝されている。水曜にはシェフィールド周辺の名所旧跡をめぐるプログラムを開催し、木曜は一般的な交流イベント、金曜の夜はパブを訪問するというプログラムを開催しており、継続的に留学生がシェフィールドへ馴染むことができる機会を設けている。

これらのプログラムは授業開講期間のみ行われているが、休暇期間中も規模は小さくなるものの交流イベントは行われている。その他、イギリスの家庭へのホームステイを行うプログラムも提供されている。特に国内出身の学生が帰省してしまうクリスマスにはこのプログラムを利用する留学生が多く、イギリスの伝統的なクリスマスを体験する機会としても好評だという。正規の留学生の他にも短期留学や交換留学の学生が平均 3,000 人程度在籍しており、交流イベントなど一部のプログラムは短期留学の場合でも利用できる。

短期留学、交換留学を利用してシェフィールド大学へやってくる学生へのオリエンテーションは学期開始時に行われ、銀行口座開設やビザの手続き、学習上の相談への対応を行なっている。

留学生へのサポートは現在のところ 50 人程度のスタッフで対応している。加えて Student Union もこの種の留学生サポート業務に積極的に協力していることがサービスの充実に直結しているとのこと。

留学生募集

International student recruitment
Hannah Stelman, International Officer

Ms. Hannah Stelman

留学生募集策の一つとして、パートナーシップの構築や国内外の留学フェアの参加等を推し進めている。また、マレーシアとナイジェリアにオフィスを置いている。各オフィスと本部の留学生募集担当にはマネージャー、コーディネーター、アンバサダーと 3 種のスタッフが配置され活動している。本部の職員は地域ごとに担当しており、各地を訪問し学生誘致に力を入れている。（例：日本-韓国-台湾担当）。さらに各エージェントとの連携強化のため、イベントやアドバイザリーサービスといった活動を共同で行っている。留学生募集のためのマーケティングスタッフは 15 名いるが、そのほかに各部局にも留学生募集担当者がおり相互に情報交換を行いながら業務を進めている。学内だけで業務を進めているわけではないため、リクルートや入試、オンラインサポートについても留学エージェントと密接に関わりながら留学関連業務を行なっている。

現在多くの大学が取り入れている Student ambassador campaign を英国でいち早く取り入れたのがシェフィールド大学。留学生が自国の言語で入学希望者からの質問に対応する等、留学希望者が感じる障壁を下げ、学生同士というスタッフ-学生間よりも近い距離からの情報提供により、留学希望者の身近な情報を言語の壁なく得ることができるという利点がある。

留学希望者にとっての魅力の一つ Students' Union

留学生用の奨学金として、部局奨学金、Alumni 奨学金、外部機関（Chevening 等）からの奨学金を用意し、優秀な学生へのアピールとなっている。具体的には年間£2,000～2,500 の奨学金や、学費を半額に減額する制度を設けている。

世界各国の学校を訪問しプレゼンテーションや説明会を行なっている他、ウェブサイトや SNS、冊子などを完備することも重要である。特に SNS はターゲットにする層と同じサービスを利用してコミュニケーションを取る必要があり、中国からの留学希望者へ宣伝する際は微博を用いるなど発信手段は工夫の余地がある。例えば、Facebook で英国へ到着する前に留学生のグループを作り事前情報の提供を行うとビザの連絡もスムーズに進み、学生同士が事前に知り合いになれるという副次効果も生まれる。いずれの媒体でも大学の強みをはっきりと示すことが重要であり、ランキングや REF の結果は重要な宣伝材料である。シェフィールド大学の場合は大学・学部ランキングや研究成果の他にも Student Union の評価が高いため、教育研究以外の充実した学生生活も留学希望者へ発信している。

英語教育センター

English Language Support
Richard Simpson, Director of ELTC

Mr. Richard Simpson

English Language Teaching Centre(ELTC)では大学進学コース、語学研修用プログラム、英語教師用のプログラム等、様々なプログラムを提供している。大学進学コースは 3 週間から 30 週間の範囲で受講可能である。短期間のプログラムは企業の研修としても利用されており、日本の企業からの参加もあるとのこと。学期開始時期は 9 月・1 月・4 月の年 3 回となっている。語学のみでなく、オプショ

ンとして英国事情、社会事情の学習、IELTS 等の特別目的のクラスも受講することが可能である。

短期留学生用としては、10 週間から 12 週間の語学研修と 3 週間から 5 週間の大学の授業受講コースをセットにしたプログラムを用意している。どちらも参加学生は Student Union の施設を全て利用することができ、週末の旅行もプログラムに含まれる。協定校との交渉により内容をカスタマイズすることも可能で、目的に特化した短期語学研修も用意することができる。また、ELTC の講義は派遣元の大学の単位として認定可能なものも用意されている。例えば、英語教授法や比較的レベルの高い語学のクラスは派遣元でも単位として認定されている。日本からは東京大学からの学生を受け入れており、日本から学生を受け入れる場合は 4 月スタートのプログラムを利用することが多い。このほかにも 4 週間、6 週間、10 週間のサマースクールも開講されている。

ELTC 所属（フルタイム）の学生は、Student Union の施設だけではなくスポーツセンターや医療サービスなど大学施設・サービスが全て利用可能となっている。また、留学生向けのサポートサービスやイベントは短期語学留学の場合でも全て利用できる。

どのプログラムでも学内の宿舎の他にホームステイを利用することができる。ELTC で斡旋しており、キャンパスから 45 分以内の立地で朝食と夕食が含まれる。

留学生のキャリアサポート

International student career support
Judy Everett, Careers Adviser

帰国して就職を希望する留学生や、イギリスでの就職を望む学生へ、カバーレターや面接を各々の希望に応じて準備し、キャリア形成をサポートすることが主な業務である。特に支援を必要とするのは帰国して就職を希望する場合である。就職を希望する企業の担当者がシェフィールド大学を知らない場合も多いため、「シェフィールド大学で何を学んだのか」、「なぜシェフィールド大学だったのか」という点を、説得力を持った説明できるようトレーニングを施す機会が多い。

留学生向けのアルバイトも揃う Student Union の Job Shop

就職相談の体制は学内への情報発信も含めて充実している。ウェブサイトでは卒業生の成功事例や留学生のブログなどを広く発信しているのに加え、スカイプを使用したバーチャル就職フェアや企業プレゼンイベントなどを開催している。オリエンテーションウィークには就職へ向けた説明会も開催している。

また個別相談にも応じ、CV の書き方から就職相談まで、20 分から 1 時間の予約制で対応している。留学生からはビザについての相談も多くある。

シェフィールド大学は、独自で世界各国の就職・進学情報をまとめたサイト' My International Career'を持っている。さらに世界各地のインターンシップや雇用情報などをまとめたデータベース'Going Global'からライセンスを取得し、留学生を含めた学生がアクセスできるよう体制を整えている。

フルタイムの仕事以外にもアルバイトやインターン、職業体験に関する相談にも応じている。JOBSHOP が Student Union 内にあり、学生相談の窓口として機能している。卒業後の就職サポートも 3 年は対応している。

海外の大学との関係構築と維持

Development and management of overseas parterships
Dörte Stevenson, Head of Global Opportunities & Exchanges and Acting Head of International Partnerships

Mrs Dörte Stevenson

大学間のパートナーシップは国際戦略に則った形で新規開拓や関係の維持を行っている。大学の多様性向上や国際共著研究数の増加、留学生の募集、スタッフの流動性確保など大学の多くの面に波及効果がある基礎的な要素であるため、積極的に進めている。なかで

も国際経験の機会提供を重要視し、パートナーシップ構築のために NAFSA 等の機会を活用している。

パートナーシップの種類としては、全学または部局間協定、エラスムスプログラム協定、海外留学プログラムのための協定の他、ジョイントプログラムの提供などプログラムごとに協定がある。全学または部局間協定では組織の長が署名を行っており、どのレベルの署名が必要なのかは協定の内容や規模に応じて異なるため柔軟に対応している。

協定に基づく活動の記録を行っている。それ以外の協定では、締結後も交流の内容や波及効果のデータを収集し、協定を拡大更新していくかどうか検討を行っている。交換留学協定の中には数年に渡り利用希望者がいない例も見られ、このような場合は協定を維持するコストを踏まえたうえで見直しを行うことが多い。

現在大学間協定を通して派遣している学生は 40－50 名で、協定締結先からは 100 名ほどを受け入れている。シェフィールド大学から日本への派遣は学部生が多く、主に日本文化・言語を専攻する学生が希望する例が多い。英語圏以外への留学全般の傾向だが、特に日本への留学は言語が障壁になり、送り出す学生が少ない年が続いている。2017 年には国際基督教大学へ 1 名学生が派遣される予定である。

ジョイントプログラム

Joint degrees
Karen Anderson, Quality Manager

Ms. Karen Anderson

他の高等教育機関や組織とともにいくつかのジョイントプログラムを提供している。中でも南京工業大学との Nanjing Tech Joint Institute での学部プログラム、留学生のための University of Sheffield International College – Pathway 1の運営に関しては、運営委員会を別途設け戦略的なパートナーシップを狙っている。Nanjing Tech Joint Institute では、南京で英語開講のクラスを設けるだけではなく、シェフィールド大学でも中国語開講のクラスを置くことで、片務的なジョイントプログラムにならないよう心掛けている。また、ギリシャにある The International Faculty / City College in Thessaloniki は 1 部局として成り立っており、心理学、コンピューター科学、経営学などを学ぶことができる。

部局間での、様々なパートナーとの共同プログラムも行われている。いずれも英国高等教育質保証機構（QAA: Quality Assurance Agency）を利用し、教育の質を担保している。デュアルプログラムは多数、ジョイントプログラムは香港と行っている。その他、遠隔講義をシンガポールやマルタ、アーティキュレーションプログラムとしてマレーシアでのプログラムを終えた後、シェフィールド大学の 2 年次に進学するプログラムも用意されている。アーティキュレーションプログラムでは質保証のためフランチャイズは行っておらず、シェフィールド大学と同じ質の教育を提供できる環境があると認識している機関と共同でプログラムを提供している。

4. 日本の大学が「国際化」を図る上で、特に役立つと思われた取組み、日本の他大学にもぜひ知ってもらいたいと思えた新規かつユニークな取り組み・方針等について

留学生募集キャンペーン #WeAreInternational

「シェフィールド大学」を押し出さず英国への留学自体の魅力をアピールする #WeAreInternational のキャンペーンを、部署を横断し広く推進している。英国内でのイニシアティブという観点でも興味深い取り組みである。

Student Union

英国各大学では Student Union という学生自治会が設けられているが、シェフィールド大学の Student Union は数年連続、国内第 1 位を獲得するほど評価が高い。カフェやレストランでのイベント、アルバイトやインターンシップのアドバイスセンター（JOBSHOP）など、様々な機能を有している。さらに学生情報サービスセンターやボランティアセンター

[1] http://usic.sheffield.ac.uk/about/student-support

なども利用可能である。日本の大学でこの種の組織が設置されている例は少ないが、留学生のニーズやリクエストを学生同士で把握し互助的にサービスを提供するような試みは、大変効果的だと考えられる。

人文社会科学系へのメディアトレーニング

社会科学系や人文科学系の研究者に対してもメディア対応の基礎的なトレーニングプログラムが提供されている点も興味深い取り組みである。科学コミュニケーションやアウトリーチの一環として自然科学系の研究者がメディア対応をする機会が増えており、日本国内の大学院の教育プログラム内でこの種のトレーニングプログラムを行う例も出てきているが、まだ一般的ではない。メディアで取り上げられ機会の多い政治や経済、歴史などを専門とする研究者のメディア対応スキルを向上させ一般からの可視性を高めることは、人文社会系不要論への地道な対策になると思われる。

5. 報告者所感

今回訪問した他の大学でも感じたことだが、大学国際化を進める目的が明確にあり、目的を達成するための戦略が合理的に策定されていることが印象的だった。高等教育を監督する官庁の意向や制度の目的を忖度した結果としての目標や戦略ではなく、大学それぞれの事情や課題を念頭に置いた計画や実行手段が検討されていることを羨ましく思う。

PR は特に体制が整っており、宣伝一辺倒ではなく行動規範が整備され関係するスタッフに共有されている体制づくりには大きく学ぶところがあった。

また、国内外からの優秀な学生の募集に向けての取り組みが、多方面で見られた。Student Union の充実もその 1 つであると思われる。キャンパス内に多くの図書館を持ち、新しい工学部施設や、音楽の防音ビルなど、施設の充実に力を入れていると感じた。シェフィールド市街地との距離も近く、一方で裏手には広大なパークもあり、恵まれた立地である。

現在のところ、シェフィールド大学からは日本文化に興味のある学部生の範囲での交流が主であるが、今後日本との交流プログラムが拡大し、他分野でも連携が進む余地はあると考える。

(報告担当：尾崎、菊地)

第 8 回英国大学視察訪問　参加者リスト

	参加者リスト（所属機関名アルファベット順、敬称略）		
1	加藤 博之	関西大学	国際部　国際研究・協力グループ　職員
2	山崎 亜樹	慶應義塾大学	学生部国際交流支援グループ
3	平山 祐	熊本大学	医事課　一般事務職員
4	菊地 乃依瑠	京都大学	企画・情報部 広報課 国際広報室　広報官
5	御幡 友里子	九州大学	SHARE オフィス（スーパーグローバル大学創成支援担当）　専門職員
6	カンピラパーブスネート	名古屋大学	大学院国際開発研究科　講師
7	岸 篤史	名古屋大学	教育推進部事業推進課　係長
8	森永 翠	沖縄科学技術大学院大学	学生支援セクション
9	横田 秀和	東海大学	研究推進部研究計画課　課長
10	尾﨑 有美	東京工業大学	国際部留学生交流課　スタッフ

（所属機関・役職は 2016 年 11 月時点のものです。）

© British Council 2017